

弥生・古墳時代における長柄武器の変遷

寺前 直人*

本稿は、これまで通時的に検討されることがなかった弥生・古墳時代における長柄武器の変遷を、木製柄や埋葬施設におけるやり先と柄の位置から分析した。

その結果、弥生時代中期において柄の長さが60cm前後の戈が用いられるが、それらは弥生時代後期には消滅することが判明した。さらに弥生時代終末期になると2m前後の鉄やりが登場し、各地の埋葬施設に副葬されることが明らかとなった。また、古墳時代前期初頭には、2m前後の鉄やりに加えて、4m前後の鉄やりが登場することを指摘した。ただし、装飾的なやり鞘がほぼ同時期に登場することから、4m前後のやりは攻撃力強化のみではなく、儀礼時における武器の印象を強調させる目的でも創出されたと推定した。古墳時代中期以降、長柄武器はやりからホコへと変化するが、古墳時代後期まで一貫して2m前後の長柄武器が採用され続けることから、古墳時代中期以降の馬匹生産の開始や騎兵を有する朝鮮半島諸勢力との「交戦」をへても、日本列島では実戦的な騎兵用長柄武器を含む武装の変化は顕著ではないと解釈した。

キーワード

長柄武器、弥生時代、古墳時代、騎兵

目次

I はじめに	2 銅剣のやり転用と武器形木器
II 長柄武器の研究史	3 弥生時代の戈柄
1 文献および伝世資料・民族資料と考古資料の対比	IV 弥生時代終末期以降の長柄武器
2 古墳副葬品における長柄の確認	1 鉄製やりの出現
3 やり装着構造の検討と編年	2 古墳時代前期の長柄武器
4 弥生鉄剣転用やりと再分配	3 長柄武器の社会的意義
5 古墳時代長柄武器の全長	4 やりからホコへの変化
6 残された課題	5 古墳時代後期以降の変化
III 弥生時代の長柄武器	V まとめ
1 埋葬施設内出土の長柄武器	VI おわりに

* 駒澤大学

I はじめに

文献史料を欠く、あるいは乏しい弥生・古墳時代の戦争や武装の実態を明らかにすることは簡単なことではない。しかし、その実態の把握なくしては、当該期に進展した社会複合化において集団間の抗争が果たした役割を理解することはできない。

弥生・古墳時代における武器研究は、石器や鉄器・青銅器を中心とした精緻な型式学的分析が進展しているが、その対象は刀剣を中心とした短兵と、鏃身という投射武器の一部に集中してきた。なぜなら、柄、弓身や矢柄の主な素材である木製品が、日本列島の遺跡では出土が乏しかったからである。この有機質系遺物の僅少さに起因して、柄の構造にその認定が左右されるヤリ¹をはじめとする長柄武器の様相は、いまだ不明瞭である。また、当該期には石製、青銅製、鉄製の武器が存在しているが、研究のごく初期をのぞき、それらを横断的、統合的に論じた研究もかぎられている。ましてや、それを弥生時代から古墳時代という時代区分をこえて長期に扱った研究はほとんどなかった。

もちろん、弥生・古墳時代の長柄武器に関する個別の議論は皆無ではない。とくに弥生時代終末期から古墳時代におけるヤリの構造的な理解や編年は、飛躍的に深化している。

そこで、本稿ではヤリやホコ、戈といった長柄の武器類を検討することによって、弥生時代以降の日本列島において長柄武器が戦術・戦略、あるいは社会的にどのような位置を与えられていたのかを明らかにしたい。それらの整理をふまえて、弥生・古墳時代における長柄武器の変遷をまとめ、その背景にある集団間の抗争や武威の社会的機能の質的变化を展望することを目指す。

II 長柄武器の研究史

1 文献および伝世資料・民族資料と考古資料の対比

有機質資料の出土が乏しい研究初期の段階におい

て、長柄武器の存在は古墳における副葬品の様相と記紀等の文献によって議論された。高橋健自は、柄を挿入することで固定する袋部を有する鉄器を槍と記したうえでホコと訓読し、議論を進めた(高橋 1912)。まず、後世の「鏃」の如く、左手で前方を握り、右手で後方を握る両手使用ではなく、『日本書紀』舒明紀にみられる「如巖矛取中事」や「中臣壽詞」にみられる「本末不傾、茂槍及中執持氏奉令留」から、ホコは水平に保って、右手で柄の中央をもつと推定した。また、左手に盾をもつことを議論の前提としている点にも注意が必要である(高橋 1912: 15-16)。

後藤守一はヤリ類の柄長について、楽浪木槲墳出土の銅矛と石突の間隔が約2m弱であることを紹介した。加えて、正倉院御物「手鉞」5本の柄長が57~100cmで平均71.5cmであること、「鉞」33本の柄長が310~427cmで平均358cmであること、日本列島における中世以降のヤリ実物がおおむね4m内外であること、高句麗古墳壁画や中国大陸の画像石にみられるヤリ長に言及した。さらに台湾や太平洋諸島の諸族が用いるヤリ柄が2~3m内外であることを根拠に、日本上代のヤリ長も2~3mであると推定している(後藤 1926: 102-106)。1937年には石川県加賀市狐塚(狐山)古墳出土の剣形鉄器について、鉄身と付属金具のありかたから、茎式鉞(後藤 1937: 61)あるいは「儀器の一種」と考えている(後藤 1940: 21)。

末永雅雄は、日本列島における武器の歴史の変遷を総括するなかで、長柄武器を長刀、鉞(槍・戈・戟・棒稍)、鏃の3種に区分して、それぞれを詳細に論じた(末永 1943)。まず、長刀(薙刀)は中世(鎌倉時代~室町時代末期)における主要武器であり、江戸時代には形状や使用者も変化すると指摘する。乗馬者が長刀を携えるのは不便であり、したがって歩兵の武器であること、この用法が下級戦士、僧侶、そして婦女子の武器となる遠因であるとした。また、後藤がヤリ長を復元するために言及した正倉院の手鉞について、長刀との直接的な関係を想定した(末永 1943: 71-74)。次に鉞は槍・戈・戟・棒稍の字が当てられることを紹介したうえで、最も使用範囲の広い鉞の字をあてるとした(末永 1941: 240)。実用的な「銅矛」の

1 弥生・古墳時代における武器のうち、下端に袋部をもち、柄を挿入して使用するものをホコ、剣と同じく茎を柄材がはさむものをヤリとして以下の議論を進める。なお、用字に関する以下の研究史をふまえて、本稿では両者ともにカナで表示する。ただし、先行研究を参照する場合のみ、先行研究での記述を優先する。また、本稿では両手で把握するために必要な20cm以上の長さを有する柄を長柄とする。

存在と『日本書紀』神代における「矛」の用字をふまえて、古墳時代から平安朝初期まで鉾は実用であり、鎌倉時代以後は鏑に取って代わられると考えた（末永 1943：75-77）。なお、正倉院御物の鉾柄の中央に把握部を設けている事実などをふまえ、先に紹介した高橋と同じく、鉾は投げ突きする刺突武器だと考えている。また、甲冑の発達により盾が不要となり、片手把握の鉾は、両手で全身の力を込めて繰り出すことで強力な刺突力を発揮する鏑に取って代わられたと解釈している点も興味深い。さらに高知県土佐神社、愛媛県大山祇神社、奈良県石上神宮に伝わる鉾を例にあげ、鏑の登場後、鉾は儀礼用に特化していったという理解を示す（末永 1941：311）。

最後に、末永は鉾に代わる日本列島の長兵として、鏑を検討する（末永 1943：78-81）。まず、文献や絵画資料を駆使して、鏑の登場を平安時代後半まで遡及する可能性に言及し、武道経験のない農民兵をもって編成した鏑隊に多くの成功例があることをあげ、歩卒も武将も鏑を携えるようになったと理解する。また、江戸時代の参勤交代の隊列の先登に立てられた鏑を例にあげ、武家はそれぞれに特徴ある鏑鞘を製作しており、その社会的地位を象徴する武器であったことを強調している。後に述べる加飾された古墳時代のヤリ鞘を考えるうえで、興味深い指摘である。

以上の末永の枠組みは、出土例に乏しい時代における文献や絵画等を駆使した武装復元の到達点を示しており、あわせて日本列島における通時的な武装変遷を展望した成果として重要である。また、その理解の背後には、剣とホコ（鉾）、盾からなる大陸系武器で構成される古代的武装が、刀とヤリ（鏑）という日本の武器からなる中世的武装へと変化するという大きな枠組みが存在しているのである。

2 古墳副葬品における長柄の確認

アジア・太平洋戦争敗戦後における古墳発掘の進展は、長柄武器研究にも新たな知見をもたらした。小林行雄は、三重県伊賀市石山古墳（小林 1950：95）の発掘成果を念頭に全長3.4mのヤリ柄、あるいは兵庫県丹波篠山市雲部車塚古墳出土の「柄も全部鉄で作った全長2mあまりの異例」に言及している（小林 1951：196-199）。この段階で小林はヤリとホコの両者を「鏑」あるいは「鏑身」としている。その後、執筆を担当した図解考古学辞典では、弥生時代の磨製石剣や銅剣とよばれているなかにも、ヤリとして装着され

ていたものと推測し（小林 1959a：996）、鉄製のヤリについても中山平次郎が報告した福岡県古井の甕棺墓出土例（中山 1925）をあげる。このような弥生時代の鉄ヤリが、鉄ホコに先行する古墳時代前期の鉄ヤリ盛行につながったと考えたのである（小林 1959a：685-686）。なお、末永らの先行研究をふまえ、日本古代には、茎をはさむ「槍」も袋部に柄を挿入する「矛」も、「ほこ」と呼称されていた可能性が強いとした（小林 1959a：996）。石山古墳では中央槨と東槨の棺外両側より、一部に赤色顔料や黒漆の痕跡を伴う合計48本のヤリが検出されたと報告されている（小野山・森下・高橋 1993）。

その後、奈良県天理市上殿古墳より良好なヤリ柄の痕跡が検出された（奈良県教育委員会 1966）。古墳時代前期後半に属する上殿古墳は直径約23mの円墳である。墓壙中央からは粘土床が検出されており、棺側に設けられた柵状施設には鉄鏃、銅鏃や革製草摺などとともに10本のヤリが検出されている（図4の3）。ヤリ群は粘土床上に配置され、さらにその上部が厚い被覆粘土で覆われていたため、柄に塗布された漆膜とともに木柄の形がスタンプされていた。また、ヤリ先165cmから50cmの範囲は絹糸巻ではなく平織が観察できる例が報告されている。柄中央を把握部としたヤリや、ヤリ身と柄との装着部分が比較的残っていたヤリは、柄の横断面形が杏仁形であることが確認されている。さらに柄の中央付近に「竹の繊維」が観察できたことを根拠に、一般には中世以降にみられる打柄の手法が用いられたと推定されている（奈良県教育委員会 1966：49；菅谷 1975：321）。打柄とは、木製の心材の周囲に、細長く加工した竹ひごを巻き、膠などで接着して紐を巻き、さらに漆をかけて固めたヤリ柄のことで、強度と軽量性を両立させた柄である。なお、ヤリ柄長は3.2~3.5m、全体で3.8mに達すること、表面には絹糸を巻いたうえで、黒漆を塗布し、巻目によって斜格子文を構成することが明確となった。その後も、粘土を多用した直葬系埋葬施設を中心に柄部が検出される事例が蓄積されていくこととなる。

それらの成果をまとめた菅谷文則は、古墳に副葬されたヤリは全長3.5mにおよぶこと、長柄中央部にやや異なる糸巻を施すものがあり、後世のホコのように柄中央に膨らみをもたせたものである可能性があること、靱や盾とともに配置されることが多いことを指摘した。さらに古墳時代においてヤリがホコに先行して使用され、古墳時代中期、具体的には大阪府堺市七観

古墳の段階でホコがヤリを点数的に上回るとした(菅谷 1975)。なお、柄との固定方法の差違から、ホコの機能的優位性を主張する見解に対して(西川 1966: 253)、絹糸の葛巻きと漆塗りによってヤリも柄と強固に固定されたとした(菅谷 1975: 333-334)。そのうえで、弓矢とヤリで武装した「強力な戦闘集団」こそが、古墳時代前期における首長権力の根源の一つとなっていたと推定したのである(菅谷 1975: 339)。以後、古墳時代における長柄武器の様相については、菅谷の整理と理解が一つの基準となり、議論が進むことになる。

3 ヤリ装着構造の検討と編年

剣状の鉄製品に長柄が伴う事例が明らかになると、次にヤリ特有の装具構造が判明していくこととなる。田中新史は、千葉県君津市八重原1号墳出土の鉄製装具を伴うヤリを報告するなかで、ヤリの柄が4枚の部材を組み合わせて製作されていることを指摘した(田中 1989: 33-34)。この時点では茎造りの例を茎銚、袋造りのものを袋銚に区分し、長柄の刺突武器は加耶系の袋銚の普及によって、伝統的な茎銚が衰退していくという理解を示した。八重原1号墳は直径約29mの円墳で、三角板横刃板併用の銚留短甲と三角板銚留短甲が共伴しており、鉄鏃型式の検討を通して、5世紀第3四半期と推定されている(杉山 1989: 56)。続いて、千葉縣市原市神門3・4・5号墳を紹介するなかで田中は、名称を呑口槍としたうえで、4枚板で構成されたヤリが古墳時代前期には一般的であるとした(田中 1991: 133-134)。

池淵俊一は、後藤守一以来の柄縁平面形態に対する名称を整理し、呑口式と合口式を定義づけたうえで、ヤリ特有の拵えの特徴を①柄(把)の断面形が杏仁形、②糸巻→漆塗で仕上げる、③刃部まで柄(把)縁が食い込む、という3点をあげて、認定基準を明確にした(池淵 1993: 53-54)。

菊地芳朗は、ヤリの製作工程を復元し、その機能と変遷について言及した(菊地 1996)。まず、柄構造を刃部下端まで露出する関把縁タイプと、刃部下端は把内におさめられる身把縁タイプに区分した。前者は把

握位置が刃部に近くなる点で刺突とともに切断にも適するのに対し、後者は刃部から遠い位置を握る点、そして側面が別材になっている点から切断には適さず、主に刺突を目的とした構造であると理解した(菊地 1996: 66)。さらに弥生時代から古墳時代中期にかけての刀剣類の変遷を4段階に区分した。ヤリが弥生時代中期後半²に存在し、古墳出現期には柄縁を山形に突出させるヤリが岡山県から千葉県の大域に認められること、前期初頭から前期後葉の段階には奈良県メスリ山古墳のようなヤリの大量副葬が認められ、短剣とともにヤリの絶対量も増加するとした。そして、前期後葉から中期初頭には園部垣内古墳などにみられる大刀の増加とともに、相対的に剣・ヤリの副葬数が減少しはじめると考えたのである。

豊島直博は、田中や菊地の着柄方法と柄材の組み合わせと柄の長さから、弥生時代終末期に属する広島市弘住3号墳、千葉県袖ヶ浦市椿SX3号墳、同県木更津市高部32号墳出土例をヤリの候補として、ヤリ身検出位置と埋葬施設の壁体の関係から全長に言及した(豊島 2003: 65-66)。豊島によって、粘土槨以外の古墳時代開始期前後のヤリ長が具体的に論じられることとなった。

菊地も群馬県太田市成塚向山1号墳の鉄製品を論じるなかで、ヤリについても再論した(菊地 2008)。菊地は、ヤリを柄縁が山形に突出する山形柄縁槍と直線となる一直線柄縁槍に区分し、前者が古墳時代早期に、後者が古墳時代前期初頭以降に出現するとし、両者の併存は機能差ではなく、前者を上位とするランク差であると理解した。また、村上恭通の指摘をふまえ(村上 1999: 74)、定型的な山形柄縁槍成立の背景には、当該期における朝鮮半島のホコを中心とした長柄武器の影響を想定している。

このような型式学的理解の進展により、柄の残存状況に左右されずにヤリの認定ができるようになり、定型的なヤリの消長や分布を検討することが可能となった。それらをふまえて、豊島は弥生・古墳時代の鉄ヤリ型式分類と政治的性格の検討を進めた(豊島 2008, 2010)。まず、ヤリ柄端面の加工と糸巻範囲を見極め、糸巻底辺型、糸巻頂点型、直線型A類、直線

2 この時期に属する福岡県飯塚市立岩堀田遺跡や同県春日市門田遺跡出土例は、刃部まで柄材が食い込み、柄の横断面が杏仁形を呈するなど、弥生時代終末期以降の鉄ヤリとの共通点が多い出せる。一方で、2枚の把木で茎を挟み込む構造であり、後述する古墳時代開始期のヤリとは異なる(小田 1977; 豊島 2003: 67)。空間的に制約される甕棺内に副葬されており、後に述べるように戈柄が存在するにもかかわらず、この段階における確実なヤリ柄はみられない。本稿では中期にさかのぼる鉄ヤリを認めることに慎重な立場をとる。

表1 古墳時代「伝世鏡」流入をめぐる諸説

移動をめぐる仮説	下垣分類	最初に入手・保有した地域	最終埋納（副葬）地域
副葬地域における長期伝世説	A案	畿内を中心とした中四国以東	長期保有 畿内を中心とした諸地域 畿内を中心とした諸地域 畿内地域中枢→各地 畿内を中心とした諸地域
政治中枢・器物の東遷説	B案	北部九州等	
地方・中央・地方3段階移動説	C案	北部九州等	
古墳時代開始期流入説	D案	中国大陸・朝鮮半島	
復古品流入・生産説	E案	踏返し等による生産 畿内を中心とした諸地域	

※下垣（2018）表2を参考に作成

型B型の4型式にヤリを分類した。それぞれの技法的前後関係を比較し、それを副葬された埋葬施設の年代観に照らし合わせることで、弥生時代終末期に糸巻底辺型が、古墳時代前期初頭に糸巻頂点型が出現し、その後、前期中葉以降に順次、直線型A類、直線型B類が加わっていくという変遷を捉えた。さらに製作技法が画的であること、糸巻頂点型以降のヤリが畿内地域に集中して分布することを根拠に、奈良盆地東南部の勢力によって生産され、軍事的・政治的意図に基づき各地に配布されたと解釈した（豊島 2010：131）。

4 弥生鉄剣転用ヤリと再分配

豊島はこの論考において、もう一つ重要な指摘をしている。それは柄の画一性とは対照的なヤリ身の多様性である。具体的には刃部下端の刃潰しや、刃部にあけられた未使用の目釘穴の存在である。とくに刃関双孔と呼ばれる目釘穴を有する鉄剣は弥生時代後期後葉以降に激減することから、その特徴を有する古墳時代前期に副葬されたヤリ身は弥生時代から長く使われていた伝世品であると考えた（豊島 2010：132-133）。様々な来歴の鉄身本体を一旦は畿内に集め、画的な柄を取りつけたのちに配布するという循環的な交換形態があったと推定したのである（豊島 2010：138）。

地方から畿内への集積と再配布を理解するためには、前段階の弥生時代後期・終末期における鉄剣分布の偏在が重要となる。刃関双孔を有する鉄剣は弥生時代に盛行する。すでに中期に確認できる北部九州地域に加えて、後期以降は東海・関東地方で増加するという傾向がある（野島・高野 2002：26-27）。その後の研究でも、畿内地域には乏しいという分布傾向が肯定されている（杉山 2013）。にもかかわらず、弥生鉄剣転用ヤリが神戸市西求女塚古墳や奈良県天理市黒塚古墳といった畿内地域の大型古墳から出土しているのだ。

この問題は、古墳時代前期における漢鏡副葬の解釈、いわゆる伝世鏡をめぐる議論とも密接な関係があると私は考えている。定型的な古墳が築造される3世

紀後半以前に「製作」されたとされる中国鏡、具体的には岡村秀典による編年の漢鏡5～7期（岡村 1999）が、前期古墳に多数副葬されるという現象と一致するからだ。とくに漢鏡7-1期とされる上方作系浮彫式獣帯鏡、飛禽鏡が広域で均等に出土するのに対して、漢鏡7-2期とされる画文帯神獸鏡が畿内地域を中心に分布するという傾向と、糸巻底辺型と糸巻頂点型の分布傾向（豊島 2010：129）は類似している。

弥生時代後期段階に「製作」された中国鏡が古墳時代前期に多数副葬されるという現象に対する諸氏の解釈は、表1のように整理されている（下垣 2018：109-112）。このうち、C案、すなわち製作地である中国大陸から北部九州地域などにまずは流入し、長期保有されたのち、畿内中枢に移動して諸地域に再分配されたとする解釈と、先の豊島による弥生鉄剣転用ヤリの解釈はほぼ同一なのである。下垣仁志も、慎重ながらもC案が資料状況にもっとも合致しているのではないかと推察している（下垣 2018：112）。私は下垣のC案を地方・中央・地方3段階移動説として、議論を進めることとする。

実戦目的か儀礼目的かはさておき、古墳時代開始期において、従来の鉄剣に加えて、鉄ヤリという長柄武器が希求されていたことは、以上の事実関係から明らかである。また、その分布から豊島が指摘しているように王権中枢において、長柄武器が重要な役割を与えられたと考えられよう。鳥取市青谷上寺地遺跡や島根県美郷町沖丈遺跡では鉄ホコの袋部のみが出土しており、弥生時代には鉄ホコの身部分を切断し、わざわざ剣として用いたことが指摘されている（豊島 2010：40）。このような志向性が古墳時代開始期には一変し、それまで剣として用いられた剣身を、あえてヤリにつけ替えるという方針転換をみてとることができる。

5 古墳時代長柄武器の全長

古墳に副葬されたヤリやホコの全長を考えるうえで、門田誠一による東アジア的視点での比較（門田

1988) や仁木聡による副葬ヤリ・ホコの悉皆的な集成(仁木 2004)も重要である。

門田は、加耶地域の埋葬施設における鉄ホコと石突の検出位置から全長を推定したうえで、日本列島のヤリやホコ、そして中国大陸春秋時代や漢代の長戈やホコと比較した。そして、2m強と3～4mの長柄武器があることを指摘し、加耶地域における副葬武器の組成から「石突を伴わない鉄矛と弓箭で武装し、鉄斧や鉄鎌をもつ歩兵と、甲冑に身をかため、長剣あるいは長刀、そして、石突を伴う長大な鉄矛と、弓箭で重武装し、時には金銅製の馬具(胡籙など)を身につけ、場合によっては鎧馬にさえまたがった騎乗の士」という二つの武人像を想起した(門田 1988:508)。対象資料は少ないものの、歩兵の長柄武器を2m強、騎兵のそれを3～4mとした点は、長柄武器長短の用途論として重要である。

また、古墳時代におけるヤリ、ホコの出土状況を集成した仁木は、副葬された長柄武器の全体的傾向をはじめて明らかにした(仁木 2004)。氏は、ヤリ・ホコ先と石突の位置から全長推定可能な例(I類)、柄と判断できる漆膜など有機質残存部までの長さを測定できる例(II類)、そしてヤリ・ホコ先検出位置と埋葬施設内法で全長を推定できる例(III類)、という3つの事例から全長を算出した。ただし、II類は「木柄が断続的に遺存している場合は、槍身・矛身から最も離れて検出された、対応関係にある木柄の端部までを全長とする」としており(仁木 2004:3)、必ずしも本来の全長ではない点には注意が必要である。

6 残された課題

長柄武器の出現時期やその増減の解明は、武装や軍事編成を復元するために不可欠である。しかし、これまでみてきたように古墳時代の鉄ヤリについては重要な指摘があるものの、弥生時代にはヤリ先や戈身などの作用部素材の多様で、かつ良好な副葬例に乏しいために統合的な検討が進んでいないのが現状である。それに起因し、両時代の長柄武器を連続的に論じられることは、ほとんどなかった。そこで、まずは弥生時代の長柄武器の状況を整理する。次に、仁木の方法を踏襲し、さらには木器や埴輪などの武器模倣品に関する研究をふまえ、弥生・古墳時代における長柄武器の連続的な変遷と画期を明らかにしたい。

III 弥生時代の長柄武器

1 埋葬施設内出土の長柄武器

以上の研究史をふまえて、次に弥生時代の長柄武器に関する議論と資料をみたい。弥生時代は先に論じた後・終末期をのぞくと武器副葬に乏しく、前・中期にさかのぼって武器副葬が盛んにみられるのは、北部九州地域の一部にかぎられる。

数少ない長柄武器の副葬品として注目できるのは、銅矛の存在である。弥生時代中期初頭に属する福岡市吉武高木遺跡M3号墓からは、多鈕細文鏡や細形銅剣とともに、細形銅矛と細形銅戈が検出されている。両者ともに身部には絹の付着があるが、柄は認められず、刃部のみが副葬されていたとみられる。仮に柄が挿入されていたとすれば、銅矛基部から小口までは70cmほどであった(福岡市教育委員会 1996)。

弥生時代中期前半に属する木棺墓群が検出されている福岡県宗像市田熊石畑遺跡の2号墓からは2本、4号墓からも1本の細形銅矛が検出されている。2号墓銅矛袋部の2本から小口壁体までは30～35cmしかなく、4号墓銅矛袋部から小口壁体までは約80cmであった(宗像市教育委員会 2014)。

当該期における銅矛、銅戈は柄が取り外されて副葬された可能性が高く、全長を復元する根拠とすることは、現状では難しいといわざるをえない。仮に吉武高木遺跡M3号墓や田熊石畑4号墓の銅矛袋部と木棺痕跡の壁体までの距離を柄長とした場合、その長さは80cmが限度である。

2 銅剣のヤリ転用と武器形木器

銅剣の一部は長い柄に装着され、ヤリとして使用されていたという解釈も根強い。ただし、その論拠はさまざまである。

森貞次郎は、細形銅剣の地域差に言及するなかで、瀬戸内以東において「関部に目釘孔のような双孔」をもつ銅剣に注意をうながし、中国式多樋銅剣とは異なり、平形銅剣などと同じく瀬戸内式として、垂飾りなどの紐孔であると推定している(森 1960:83)。ただし、柄の長短については言及していない。

田中琢は、細形銅剣が重い柄頭をもつ柄と組み合わせり、逆手で握って刺突する用法が採用されていたと考えた。一方、細形銅剣分布域の東半部、すなわち中・四国地方では、「剣身末端近くの左右に2個の小孔がうがたれることが多い」という事実を指摘した。

その位置から着柄のための穿孔であると類推し、「着柄法、ひいては使用法が北九州地方とはちがった可能性」があるとして、「短い茎で柄を固定しただけでは離脱しやすい使用法、おそらく槍先として使用された」と理解したのである（田中 1977：164）。目釘固定か、孔に紐を通した緊縛固定のいずれを、田中が想定しているかは不明瞭であるが、固定の強化目的の穿孔であるという解釈を前提に、田中が長柄化を想定している点には注意が必要である。

一方、近藤喬一は大阪府高槻市安満遺跡（図1の1）や奈良県田原本町唐古・鍵遺跡（図1の2）の弥生時代前期に属する武器形木器の存在を重視する。日本列島において青銅短剣が受容されたとき、その長大な儀器の存在が銅剣自体の長大化と長柄をつける使用方法をもたらしたと推定したのである（近藤 1986：142-143）。また、長柄をつけた青銅短剣を模倣した例として、山口市宮ヶ久保遺跡出土の武器形木器（図1の4）をあげている。

吉田広は、銅剣にみられる関部双孔について、関部下端から孔芯までの距離等を分析した（吉田 2014）。細形銅剣から中細形、平形I式にかけて、すなわち剣身長大型化に伴い、穿孔位置が低位置から高位置に変化するという傾向を明らかにしたうえで、弥生時代中期末葉に登場する多樋式や鉄剣形、さらに細形・中細形の再加工品の双孔は、茎に近い低い位置であることを指摘した。そこから、いわゆる鉏双孔を有する鉄剣と併行する時期の鉄剣形銅剣は関部まで柄縁が覆い、目釘固定する実用的な穿孔加工であるのに対して、細形や中細形にみられる高位置関部穿孔は柄材と剣身を目釘で固定する着柄には不向きであると考えた。さらに、関部まで着柄痕跡が残る事例がないこと、双孔位置に刃の研ぎ出しがみられる資料が少ないことから、孔に直接的な負荷のかからない着柄のためではない双孔の機能を想定した。具体的には、装飾的な布帛や紐など吹き流しを取りつける目的だと解釈した（吉田 2014：254-255）。

さらに吉田は、銅矛袋部につく半環状の耳にも吹き流し状の装飾が取り付けられたと仮定したうえで、関部双孔が穿たれた銅剣に吹き流し取り付けられたとすれば、見た目の効果をあげるためには、操作者の身体から可能なかぎり離すことが求められるとし、長柄に装着する方法を選択したと考えた。同時に本来的な長柄装着の銅矛が中四国地方では欠落している状況での代替品としての役割もみいだす（吉田 2014：256）。

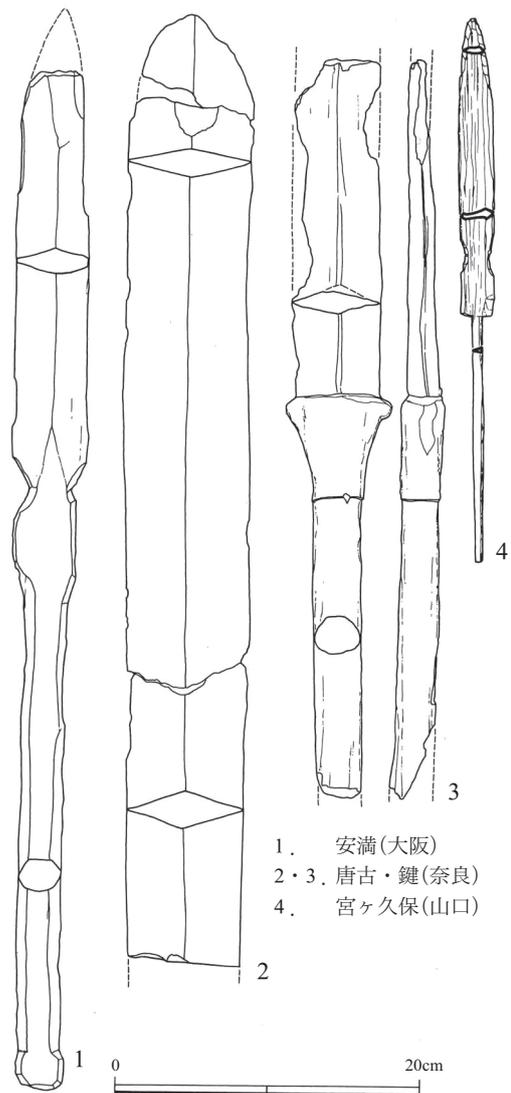


図1 長柄武器模倣の武器形木器 (S=1/5)

なお、長柄着柄を模した例として、近藤同様、図1の4をあげた。このように吉田も、先の田中と同様、関部双孔の存在をもって銅剣が長柄に装着された可能性を考えているが、田中とは異なり、儀礼的なみための点としている点には、注意が必要である。

私も、かつて高知県八田岩滝出土の関部双孔を詳細に観察し、双孔下半に紐ズレ状の摩耗が認められたことから、目釘孔ではなく紐孔であると指摘したことがあるので（寺前 2010：117）、銅剣の関部双孔を目釘ではなく紐孔とする吉田の理解については、賛意を示したい。ただし、関部双孔を有する銅剣に吹き流しや付着痕がみられないこと、銅剣と長柄を表現したとされる図1の4には吉田が重視する双孔表現が採用されていないことから、穿孔に吹き流し取り付けられたとする解釈を前提として、双孔を有する銅剣に長柄が装着されていたと結論づけるには、現段階では考古学

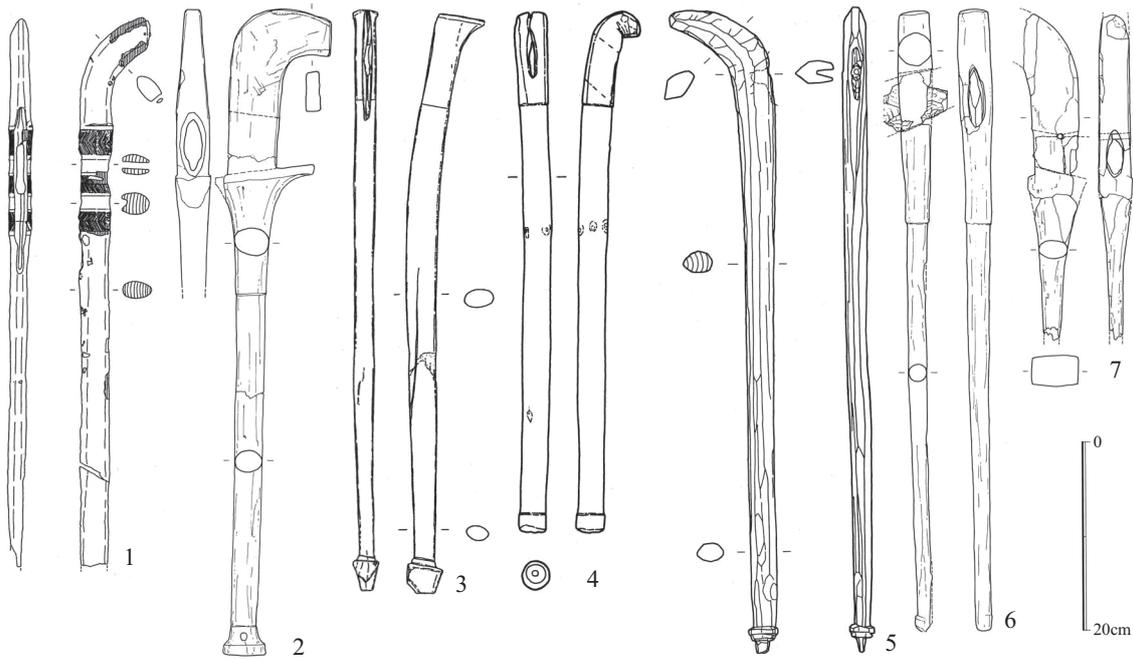


図2 弥生時代の戈柄 (S=1/8)

1. 南方(岡山) 2. 高宮八丁(大阪) 3. 下之郷(滋賀) 4. 青谷上寺地(鳥取)
5. 八日市地方(石川) 6. 鬼虎川(大阪) 7. 唐古・鍵(奈良)

的資料に乏しいと考えている。

なお、銅矛は大型化、非実用化するにつれて、鋳型粘土内型となる袋部内真土を除去しなくなることが知られている。福岡県宗像市久原遺跡1号土壙墓出土の細形銅矛は全長21.5cmで双耳をもつ短身銅矛であるが、袋部の中子真土は3.2cmしか抜かれておらず、柄を挿入するには不安定で実戦武器を意図していないことが指摘されている(柳田 2011: 375)。銅矛も、早い段階から実用的な長柄武器を志向しなかったケースもあったとみられる。

では、図1の1や3の祖型は何だろうか。まず「剣身」の横断面形とサイズは、筆者がかつて極大形磨製尖頭器とした石器に該当する(寺前 1998)。用途としては、後述する戈身として使用されたものが多数を占めていると考えられるが(寺前 2010)、図1の1や4のように「剣身」長と同じか、やや上回る長さの柄が装着されたヤリもあったと判断できよう。図1の1を参考にするならば、柄長は40cm程度、全長70cmとなる。ヤリと呼ぶには心許ない長さではあるが、次に紹介する戈柄と近似する全長であることには、注意が必要である。

3 弥生時代の戈柄

以上のように、双孔を有する銅剣をヤリとする解釈には、確実な資料的根拠に欠く。とくにヤリ柄の出土がな

いことは重要だ。一方で、弥生時代にも確実な長柄が複数出土している。それが戈柄なのである(図2)。10例近くの類例を数える(深澤 1998; 寺前 2010)。

まず、岡山市南方遺跡出土例があげられよう(岡山市教育委員会 2005: 81)。基部端を欠くものの、ほぼ全形を知ることができる資料である(図2の1)。全長57.2cm以上をはかり、柄側縁には戈の胡部に対応する長さ15cmの浅い溝が彫り込まれている。貫通する挿入孔は手前側で長さ5.0cm、反対側で4.0cmをはかる。幅はいずれも0.7cmであった。また、装着部側面には綾杉文が3条施されており、さらにその上下には幅0.4cm前後の漆剥落部分があり、紐ずれの反映である可能性がある。柄上端は外方背面に湾曲しており、円孔が穿たれていた。吹き流しなどの装着が想定できる。

大阪府寝屋川市高宮八丁遺跡の木柄(図2の2)も、形状から戈柄であると判断できる(寝屋川市教育委員会 1989; 寺前 2010)。全長68.4cmをはかるサカキ製の木柄であり、弥生時代前期中葉から前期末の生活面に伴うとされる溝105から出土している。柄頭に背面にむけて強く屈曲するのが特徴的である。挿入孔背面側には4.0cmの突出が認められ、前面側にも欠損面があることから同様の突出があった可能性がある。挿入孔前面は長径6.7cm、短径2.7cm、同背面は長径5.5cm、短径1.9cmをはかる。報告書では消極的に石

斧柄の可能性が指摘されている。しかし、挿入孔の法量からは幅5.5cm、厚さは2cm以下の扁平で薄い基部を有する利器が装着されていたと判断できるが、当該期の石斧に、そのようなサイズの例はない（寺前 2001）。一方、このサイズの横断面を有する目釘式石戈は、この時期、打製、磨製を問わず近畿地方にも広く認められるので（寺前 2010）、石戈柄と判断できる。なお、挿入部はすでに樹脂により復元されていたため、目釘の有無は不明である。

滋賀県守山市下之郷遺跡14次調査区2の第2環濠SD1402埋土からヒノキ製の戈柄（図2の3）が出土している（守山市教育委員会 2017：144）。同一層の相伴土器はないが、上層からは弥生時代中期後葉の土器が出土していることから、同時期もしくはそれより古い時期であると考えられる資料である。全長61.6cmで外反しながら先端部までのび、柄上端は径を杏仁形に拡張し、戈挿入側と反対側に伸張する。柄側縁には挿入孔が穿たれているが、先の事例とは異なり、挿入孔は貫通しない。側縁には長さ12.1cm、幅1.1cm、深さ0.6cm程度のV字状に切り込んで浅い溝を彫り込み、中位に長さ3.3cm、最大幅0.6cm、深さ2.2cmの溝をU字状に切り込んでいる。

鳥取市青谷上寺地遺跡8区SD38からは弥生時代後期初頭から後期後葉の土器とともに、図2の4の戈柄が出土している（鳥取県教育文化財団2002：289）。全長55.5cmをはかるイヌガヤ製である。上端が外方に屈曲するのは、他例と同様である。

石川県小松市八日市地方遺跡からも戈柄（図2の5）が出土している（小松市教育委員会 2003）。ヤマグワ製で全長68cmをはかる。中期中葉以降と考えられている（吉田 2015）。上端は外反しながら屈曲している。下之郷遺跡例同様、挿入孔は貫通しない。側縁には長さ5.6cmの浅い掘り込みがあり、挿入孔は幅1.8cm、深さ1.8cmをはかる。

大阪府東大阪市鬼虎川遺跡からは、サヌカイト製打製石戈が挿入された状況の戈柄が出土している（東大阪市文化財協会 1987）。第7次調査6tNE区第14U層より、弥生時代中期初頭から中期中葉の土器を伴い出土している。全長67cmをはかるカシ類製である（図2の6）。側縁に長径6.0cm、短径1.5cmの孔を穿ち、そこに幅5.3cmの打製石戈が挿入されていた。

奈良県田原本町唐古・鍵遺跡第93次調査SK2120埋土からも、中期中葉の土器とともにサヌカイト製打製石戈が挿入された戈柄が出土している（田原本町教育

委員会 2009）。柄はヤブツバキ製で先端と下半を欠く資料であり（図2の7）、残存長34.5cmをはかる。側縁に長径5.0cm、短径1.7cmの孔が穿たれており、木目釘を用いて1.7cmの打製石戈が固定されていた。柄上端は外方背面に湾曲しており、同サイズの斧柄とは大きく異なる。このような上端の屈曲した戈の柄は、土器絵画にみられる戈の表現と共通している（深澤 1998）。なお、直径0.6cmの木製目釘は、挿入孔内で石器側縁の抉りの凹みにおさまることにより、戈身の固定がはかられていることが、レントゲン写真からも確認できる。

ほかに、山口市宮ヶ久保遺跡A溝からは、弥生時代中期後半の土器とともに全長60cmをはかる針葉樹製の戈柄が出土している（阿東町教育委員会 1998）。三重県四日市市菟上遺跡ST802上流部下層からも、弥生時代中期後半の土器とともに未貫通の戈孔を有するミズキ属の割材製の戈柄が出土している（三重県埋蔵文化財センター 2005）。また、愛知県清須市・名古屋市朝日遺跡でも斧柄と報告されている資料のなかに、先の八日市地方例と同じく側縁の穿孔が貫通しない木柄があり（愛知県埋蔵文化財センター 1992：5）、戈柄とする意見もある（深澤 1998：50）。全長は約50cmの完形品である。他例のような柄尻の突出に欠き、戈胡部を受ける施溝もみられない。さらに挿入孔が幅2.8cm、厚さ1.8cmであり、銅戈、石戈、木戈の援のサイズとは一致しない。

以上、弥生時代中期を中心に中国地方から北陸地方にかけて戈柄が存在すること、装着された戈身の素材や形状、機能はさまざまであったとみられるが、柄の長さは、55～67cmと非常に規格的であることがみてとれる。この推定長と、先に検討した木棺系の埋葬施設における銅矛の推定柄長や立岩遺跡34・35号甕棺内出土の鉄戈の柄長を85cm以下、70cm以下とする推定値は矛盾しない（小田 1977：209）。また、戈柄の横断面形に楕円形（図2の1～3・5）が目立つ点は、林巳奈夫が紹介した『周礼』考工記の記載を彷彿とさせる（林 1972：5-6）。検討できる類例が少なく、いまだ不明瞭な点を残すが、弥生時代中期までの長柄武器は、全長60cm前後の戈が中心であったと判断できる。

IV 弥生時代終末期以降の長柄武器

1 鉄製ヤリの出現

以上の様相が変化するのが、弥生時代後期以降にお

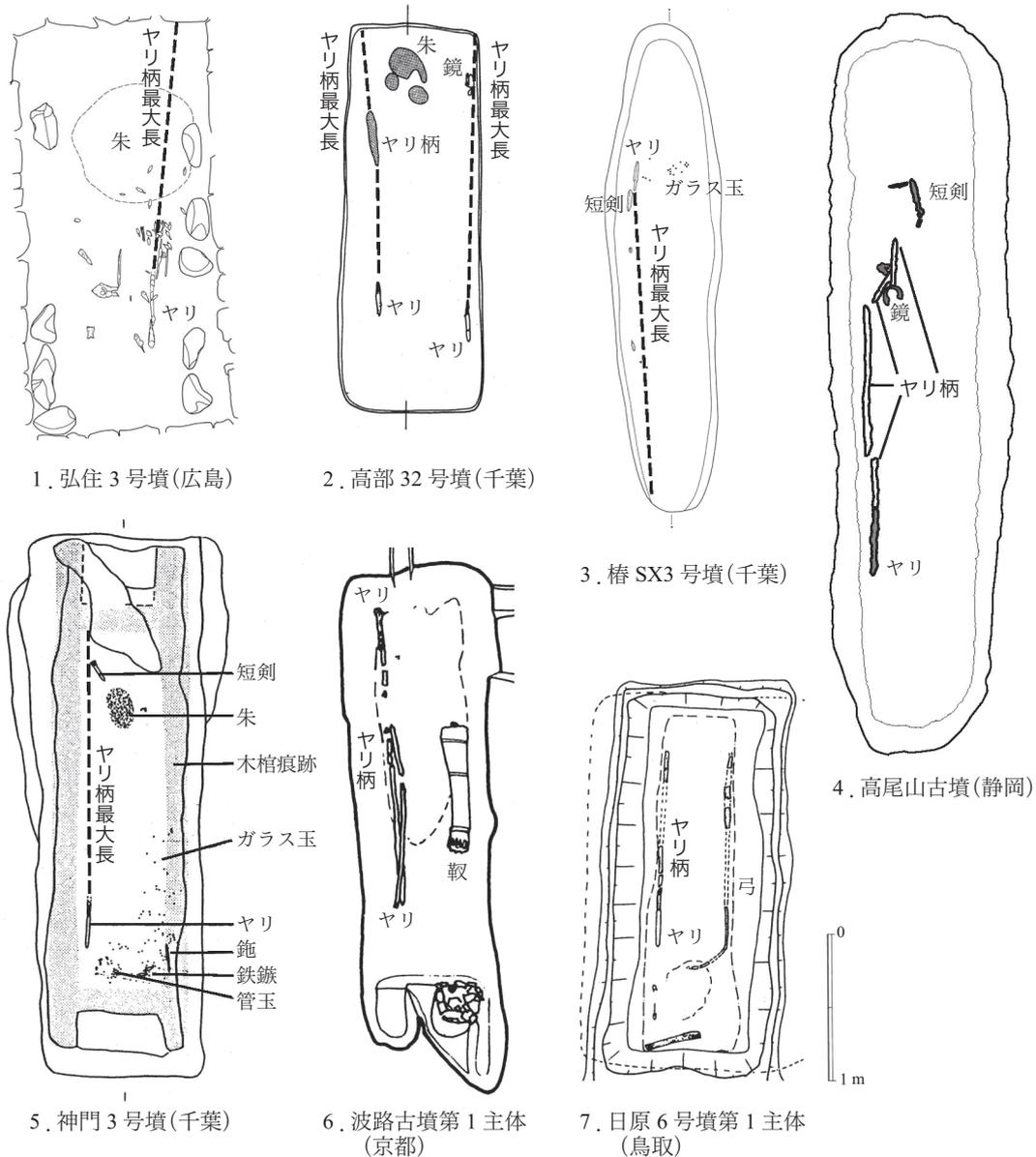


図3 古墳出現期におけるヤリの副葬状況 (S=1/50)

ける4枚合わせ式、すなわち茎両側縁には別柄材を用いる鉄ヤリの登場以降である。豊島直博は、先に紹介したようにヤリ先の検出位置と埋葬施設の内法からヤリ長を推定している(豊島 2003, 2010)。豊島の方法をふまえて作成したのが図3である。埋葬施設内法までのヤリ柄最大長を、破線で示している。

ヤリ身とともに長柄の一部が検出された広島市弘住3号墳(図3の1)は、径約25m程度の円形墳丘をもつ(広島市教育委員会 1983)。内法で長さ2.7m、幅1.2mをはかる竪穴式石室を埋葬施設として採用しており、礫床上からは異形の大型鉄鍬形鉄製品1点と鉄鍬30点、刀子状鉄製品1点、袋状鉄斧1点、やす6本、鉈2点とともに鉄ヤリ1本が出土しており、石室に流入した状態で壺と高杯が検出されている。ヤリ

先検出位置から、石室小口壁までの距離からヤリ全長の上限は2.1mとなる。

ヤリ2本が副葬され、うち1本のヤリ先長軸延長上の位置で、細長い朱痕跡が検出されている千葉県木更津市高部32号墳(図3の2)の成果も興味深い(木更津市教育委員会 2002)。墳丘長約32mをはかり、前方後方形を呈する。埋葬施設は主軸長2.65mをはかり、箱形木棺が埋設されていたとみられる。棺内には破鏡となった四獣鏡とともに鉄ヤリ2本が検出されている。細長い朱痕跡までで最短1.4m、最長2.0mのヤリ長が復元できる。反対側で検出されたもう1本のヤリも同程度の最大長となろう。なお、柄材はシノキの可能性が高いという。

同県袖ヶ浦市椿SX3号墳でも鉄ヤリが検出されて

いる（千葉県文化財センター 2001）。一辺19m前後の方墳であり、船形を呈する全長3.3mの木棺痕跡が検出されている。鉄剣1点と鉄ヤリ1本が接するように検出されており、その内側からはガラス玉17点が集中して検出されている（図3の3）。やや離れて、無茎式銅鏃1点、さらに離れて有茎式銅鏃1点と管玉2点が出土している。小口までの距離をヤリ長と仮定すれば、最大2.3mをはかる。

同県市原市神門3号墳（図3の5）でも、高部32号墳とよく似たヤリの配置をみせる（市原市文化財センター 1989）。墳丘は前方後円形を呈し、墳丘長は47.5mをはかる。短剣1点、鉄鏃2点、鉞1点、ガラス玉103点・管玉10点とともに鉄ヤリ1本が検出されており、鉄ヤリ出土位置と木棺小口までの距離を勘案するとヤリ全長は2.1m以下、およそ2m程度と推測できる。

いずれも出土土器から弥生時代終末期、庄内式併行期にさかのぼる可能性が指摘されている事例である³。

静岡県沼津市高尾山古墳も、当該期あるいはそれ以降に属する古墳である（沼津市教育委員会 2012）。墳丘長約60mの前方後方墳である。後方部頂からは、全長約5.05mの舟形木棺が検出されており、その棺内からは破鏡となった上方作系浮彫式獣帯鏡1点、鉄ヤリ1本、鉄剣1点⁴、鉄鏃32点、鉞1点、勾玉1点が出土している。棺内側縁付近より全長45.5cmのヤリ先が検出されており（図3の4）、そこから赤色の漆膜が棒状にのびる。報告書では全長1.4mとされるが（沼津市教育委員会 2012：49）、出土状況図から計測すると直線に残る部分でヤリ先を含めて全長1.8mとなり、折損し内向きにのびる部位を含めると全長2.1mに復元できる。

京都府宮津市波路古墳は、戦国時代に山城として利用されており全形は不明であるが、現状では一辺20m弱の平坦面より、大小2つの埋葬施設が検出されている（宮津市教育委員会 1988）。2段墓壇の底より全長

3mの割竹形木棺痕跡が検出されている。鉄鏃をおさめた鞞1点、鉄ヤリ2本、勾玉2点、ガラス小玉3点、土師器壺1点が出土しており（図3の6）、2本のヤリはヤリ身長40cmと30cm、全長はいずれも2mとされる（宮津市教育委員会 1988：7）。土師器壺は庄内式併行期の特徴を有するとされている。

鳥取県米子市日原6号墳は、一辺21mの方形墳であり、平坦面からは箱形木棺3基、割竹形木棺1基、土壙墓2基、そして土壙墓状の遺構1基、合計7基の埋葬施設が検出されている（米子市教育委員会 1978）。中央に位置する第1主体（SX01）は二段墓壇で構築されており、全長2.4mの箱形木棺が設置されていた。なお、埋土最上位からは低脚杯・高杯・甕・器台などで構成される供献土器が検出されており、報告書では青木VII期とされ、近年では布留I式古段階に併行する小谷2期段階とされているが、布留0式併行にさかのぼる可能性もあろう（松山 2016）。棺内には弓と推定される带状樹皮製品、鉄鏃2点、そして鉄ヤリ1点が認められる（図3の7）。鉄ヤリの茎部から続く木質腐食物、漆黒色物質が検出されており、約1.3mのヤリが配置されていたと報告されている。仮に柄端部が小口付近まで続いたとしても、1.5m程度であるとみられる⁵。

以上の埋葬施設（図3）は、弥生時代終末期から古墳時代前期に属する。全体として、次のような傾向をみいだすことができよう。まず、柄の残存状況が比較的良好であった高尾山古墳（4）や波路古墳（6）をふまえるとヤリ全長2m程度であったと判断できる。この全長と弘住3号墳（1）、高部32号墳（2）、椿SX3号墳（3）、神門3号墳（5）における推定最大長は矛盾しない。また、高部32号墳（2）と日原6号墳（7）の状況をふまえれば、1.5m程度のヤリも存在していたとみられる。次に埋葬施設内での配置にも共通性がみられる。赤色顔料や玉類の検出位置から、いずれも図3の7をのぞき、図の上方に頭部がくと推定

3 ただし、弘住3号墳出土土器は、近年では布留式併行期に位置づけられており（妹尾 2018：195）、これらの類例のなかでは築造時期が後出する。

4 報告書で棺2とされている資料（滝沢・平林 2012：49）は、豊島直博（豊島 2013）や杉山和徳（杉山 2013）の指摘をふまえ、ここでは鉄剣として議論を進める。

5 弥生時代終末期から古墳時代前期に属する2m前後の長柄武器として、仁木は他に福岡県朝倉市立野遺跡10号方形周溝墓出土例、島根県松江市上野1号墳、京都府福知山市広峯15号墳、同府園部町園部垣内古墳、三重県伊賀市石山古墳、静岡県磐田市松林山古墳、福島県会津坂下町森北1号墳をあげる（仁木 2004）。ただし、立野遺跡をのぞくと柄端部の痕跡は報告されておらず、最大長を確定する根拠とはできない。また、立野遺跡10号方形周溝墓第1主体部棺外からは鉄ヤリと筒形銅器が1.55m離れて検出されていたが（福岡県教育委員会 1984：57）、筒形銅器開口部は鉄ヤリとは逆の方向をむいて検出されており、さらに筒形銅器に内包されていた小銅舌が、1.1m離れた箱式石棺蓋石上から検出されている。したがって、葬礼時に長柄は折損されたと判断できる。

されているが、図3の1から5では頭部と逆方向にヤリ先が向く位置に配置されており、さらに図3の1・7をのぞくと被葬者の右手側には必ずヤリが置かれていたこととなる。

この時期におけるもう一つの大きな変化は戈柄が確認できなくなり、打製・磨製の石戈、銅戈のみならず、鉄戈も認められなくなる点である。戈の消滅と当該期に明確となる鉄ヤリの存在は、現状では時期差があるので、厳密には連続的变化とはみなすことはできないが、大局的には長柄武器の大きな画期であることを、ここでは強調しておきたい。戈を中心とする全長60cmの長柄武器から2m前後のヤリへの変化の背景を考えるうえで、深澤芳樹による古代中国における戈柄のありかたとの比較が参考となるかもしれない(深澤1998)。深澤は、中国にみられる310cm前後と130cm前後の長短二種の戈のうち、長戈が弥生時代にみられないこと、短戈も日本列島のそれはさらに短いことを指摘した(深澤1998:53)。さらに春秋時代における長柄武器の存在を弓兵や長兵など異なる装備をもつ5人編成の部隊である「伍」の成立と深い関係にあると考えた林巳奈夫の解釈(林1972:426)を前提に、このような軍事編成の未成立・未成熟が、長戈の欠落と関係する可能性を指摘している(深澤1998:54)。このような東アジア的視点に立つならば、少数ながらも中国系の長刀や長剣が日本列島に広く登場する当該期における2m前後の長柄武器の出現は、日本列島における中国的な軍事編成の萌芽を読み取ることも可能かもしれない。

2 古墳時代前期の長柄武器

古墳時代前期初頭の大型古墳における鉄ヤリは、奈良県天理市黒塚古墳や兵庫県神戸市西求女塚古墳から知ることができる。

黒塚古墳は墳長134mの前方後円墳である(奈良県立橿原考古学研究所2018)。後円部堅穴式石室棺と割竹形木棺にはさまれた棺西側辺に7本、同東側辺に6本、棺内には1本(ヤリ2)の合計14本が検出されている(図4の1)。棺内遺物とされる副葬品は他に画文帯神獸鏡1面、直刀1点、剣1点がある。東西棺外の副葬品は基本的に木棺蓋上に置かれたと考えられている(水野2018:314)。ヤリ長柄端部の石突は検

出されていないが、棺床西側で長柄のものとみられる漆被膜が確認されており、この部分を終端とすれば、ヤリ先からは約3mをはかる。報告書では短く見積もって2.7m、長く見積もって3m以上と考えられている(水野2018:405)。また、棺内に配されたヤリ2の位置と棺の内法を反映するとみられる赤色顔料の広がりを考慮すると最長2.2m(水野2018:317)、あるいは2.3m以内(奈良県立橿原考古学研究所2018:209)となる。

黒塚古墳と同じく古墳時代前期初頭に属する西求女塚古墳からも複数の鉄ヤリが出土している(神戸市教育委員会2004)。崩落した状況で検出された堅穴式石室は、仕切石によって主室と副室により区分されていたとみられる。復元長約5mの主室からは2本、全長0.75mの副室からは8本の鉄ヤリが鉄剣や鉄鏃と切先方向をそろえて検出されている。副室は幅0.95mで、石室高は約0.8mと復元されていることから、1m以上の長柄を保ったまま副葬されていたとは考えられない。ただし、柄材とみられる木材付着が副室出土の鉄ヤリに観察できることから、柄を途中で折ったり、切断されたりして副葬されたと考えられる⁶。

同様の状況は、墳長55mの前方後方墳である兵庫県たつの市権現山51号墳の出土状況にもみられる(権現山51号墳刊行会1991)。後方部頂からは一部盗掘をうけた堅穴式石室が検出されている。棺内からは遺体頭部を圍繞する銅鏡5面と重なるように鉄ヤリ1本が検出されており、遺体頭部と石室北小口の間に位置する金属器集中部から、3本の鉄ヤリが銅鏃、鉄鏃、鉄鋸、鉄鉈とともに検出されている。この集中部からは鉄製石突1点も検出されているので、ヤリ柄が折られた状況で副葬や有機質製容器におさめられていたとみられる。

以上の3古墳よりも後出するものの、滋賀県東近江市雪野山古墳における成果も重要である。雪野山古墳は墳長70mの前方後円墳であり、後円部において未盗掘の堅穴式石室が調査された(八日市市教育委員会1996)。石室と木棺にはさまれた西北棺外からは鉄ヤリ1本(ヤリ1)が検出されており(図4の2)、棺外西南には小口側に端面をもつ断面円形の黒漆塗り棒状品が検出されている。これをヤリ長柄の端部とすれば全長は4.6mと復元できる(杉井1996:73)。反

⁶ 古墳時代前期後半に属する島根県松江市奥才14号墳でも箱式石棺棺外に配置された鉄ヤリに伴い良好な漆膜が検出されているにもかかわらず、途中で途絶していることから、切断後の配置が想定されている(鹿島町教育委員会1985:115)。

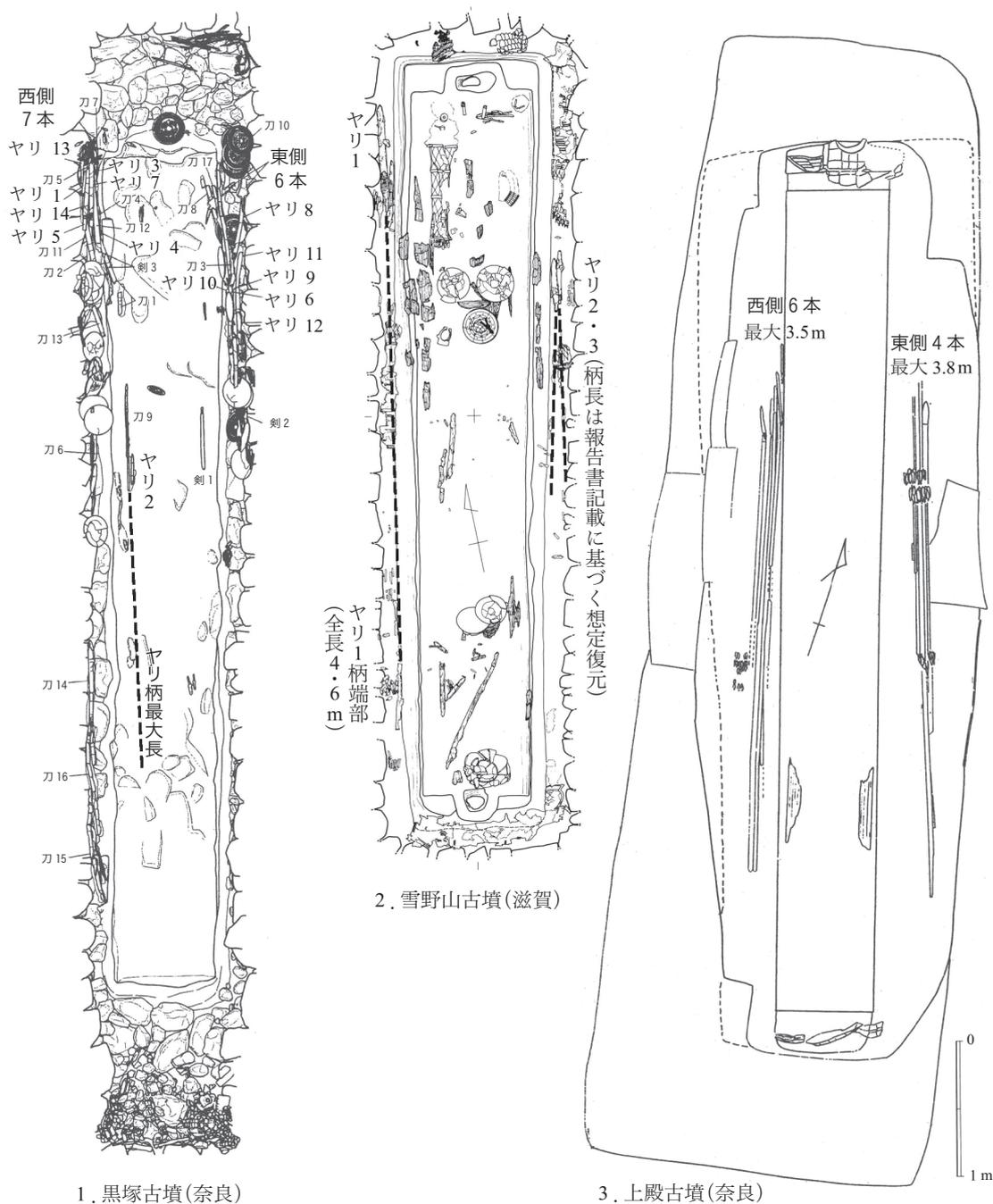


図4 古墳時代前期におけるヤリの副葬状況 (S=1/50)

対側の棺外東側でも、ヤリ2本（ヤリ2・3）が検出されており、ヤリ茎より南50cmには黒漆塗りの棒状品が検出されている。ただし、これより南側には漆塗り製品の範囲は広がらない。報告者である杉井健は、長柄の一部のみに黒漆が塗布されていた可能性と、先述のヤリよりも柄が短かった可能性を想定したうえで、この2本のヤリ身長が短いことから、後者の可能性を考慮すべきであると指摘している（杉井 1996：78-79）。図は短い柄を復元している。

堅穴式石室出土例が多いため、古墳時代前期初頭の

長柄の残存状況は必ずしも良好とはいえない。しかしながら、黒塚古墳や雪野山古墳の状況をふまえるならば、この段階において、前期後半以降の上殿古墳（図4の3）、園部垣内古墳、石山古墳にみられる粘土槨で明確に確認できる3.5mをこえる長柄を有する鉄ヤリが、すでに登場しているといえる。また、黒塚古墳木棺内に加えて、雪野山古墳棺外東に配置された鉄ヤリの想定長を合わせて考えると、弥生時代終末期以来の2m程度のヤリも併用されているとみられる。では、長短2種のヤリは、どのような機能分担があった

のだろうか。次に考えてみたい。

3 長柄武器の社会的意義

先の分析により、3.5mをこえる長大な長柄武器が、古墳時代開始期において採用されたことが明らかとなった。では、その目的はなんだろうか。まず、考えられるのが実戦目的の機能向上であろう。刀剣といった短兵のみの戦闘、あるいは2m程度のヤリと比べると、より長いヤリを有効に使用すれば、軍事的に優位となる可能性がある。ただし、ヤリの長短のみで戦闘の優劣を論じるのは、安易である。長大なヤリの操作術や部隊編成は他の武器とのセット関係をふまえた集団としての用兵を復元する必要があるからだ。しかし、この段階における武装の大きな革新は認められないので、より長いヤリの出現のみをもって、戦闘方法の変化を強調することはできない。

むしろ、武威の表示としてより長柄のヤリが求められたとは考えられないだろうか。ヤリを頭上に掲げたときに最も目立つヤリ鞘についての興味深い研究が、奈良県御所市鴨都波1号墳の成果に基づき（御所市教育委員会 2001）、藤田和尊・木許守によりなされている（藤田・木許 2011）。鴨都波1号墳は、古墳時代前期中葉に属する長辺20m、短辺16mの方墳であり、未盗掘の粘土槨が検出された。棺外からは2本の鉄ヤリが検出されており、有機質の残存からヤリ長は2m以上とみられる。なお、棺側までヤリがあったとすれば全長3.5m、墓壙小口まで達していたならば全長4.5mのヤリ長が復元できる。注目されるのは、2本のヤリ先を内包していたとみられる鞘装具の漆膜が検出された点である（図5）。鞘尻と鞘口に塗布された漆膜の残存により、その形状を類推することができる。もっとも残存状況のよかった「鏝1」の鞘尻装具は、逆台形の台部にY字状に開く角状突起が取りつく形状であり、表面には角状突起外形にあわせた弧状に描く部分や三角形の一边を弧状にして扇形とする部分があり、一種の直弧文的な文様が施されていた。鞘口装具は断片的な検出であったが、鞘尻との部分的な一致から、鞘尻装具を天地逆転した形状であったと推定されている。「鏝2」の鞘尻にもU字状や扇形状を描く沈線が観察できたことから、「鏝1」の鞘尻装具と同様の形状が類推されているが、「鏝2」の鞘口装具には角状突起がなく、台形部分のみで構成されていたとみられる。また、取り上げ後の裏面観察によれば、「鏝1」と「鏝2」はともに鞘口装具の裏面には文様を有する

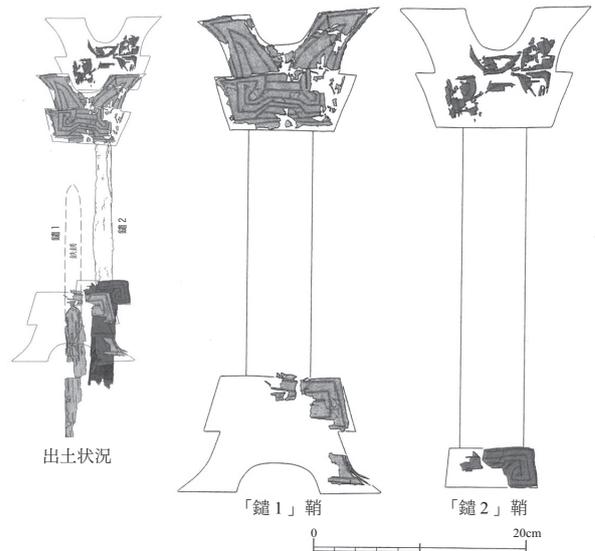


図5 鴨都波1号墳のヤリ鞘出土状況と鞘（S=1/6）

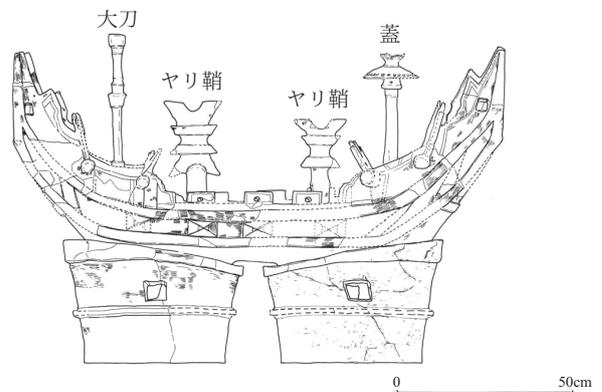


図6 宝塚1号墳の船形埴輪（S=1/20）

漆膜が確認されたが、鞘尻装具の裏面には漆膜が確認できなかった。つまり、鞘装具は表裏で異なる構成であり、正面観をもつのである。「鏝1」鞘装具は全長45.8cm、「鏝2」鞘装具は全長45.6cmに復元されている。

藤田らはこのような形態復元にに基づき、鴨都波1号墳のヤリ鞘が、これまで儀仗とされてきた木製品や琴柱形石製品、石見型埴輪と類似していることを指摘し、これらがヤリ鞘装具を模した木製品、石製品、器財埴輪であると考えた。

さらに古墳時代中期前葉の三重県松阪市宝塚1号墳造出より検出された1号船形埴輪（図6）の「立飾」との類似性に注目し（松阪市教育委員会 2005）、装飾的な鞘を装着したヤリの儀礼時の用法に言及している。藤田らの理解に立てば、船形埴輪の船上には、舳先から順に大刀1本、ヤリ鞘を有するヤリ2本、そして蓋が並ぶこととなる。頭上に蓋がさしかけられた貴人（首長）が、複数の長大なヤリや大刀をかかげる

「戦士」たちに先導された風景を彷彿とさせる造形だ。長柄武器を主体とする隊列は、高句麗安岳3号墳壁画の行列図などにみることができる。『魏志』等にもみられる中国王朝への朝貢といった彼の地の権力者との通交が、長兵を携えた隊列という政治的、軍事的演出への「あこがれ」を日本列島のエリート層に引き起こさせたとも考えられよう。すでに寺沢知子は、京都府園部垣内古墳の鉄ヤリの意義を論じるなかで、奈良県桜井市メスリ山古墳副槨に配置された212本の鉄ヤリなどを例にあげながら、「古墳祭式に武装して参列した兵士によって、被葬者の掌握していた武力を「象徴」したものか、あるいは武力そのものを誇示したものとみられる。そのさいには長柄のヤリの威容の視覚的效果は他の武器にまさっていたと推定される」と述べ⁷、武器組成におけるヤリ組成の低さから「初期のヤマト政権がヤリを政治的に用い」たのであり、「ヤリを用いた戦闘が実戦力としてその効果がとくに重視されていたものではないことを示している」とした（寺沢1990：114）。儀仗と共通するヤリ鞘を有する長大なヤリは、武威の示威行為に非常に効果的であったと考えられる。

以上をふまえるならば、古墳時代開始期以降、葬送（喪葬）儀礼を含めた権力者の政治的なパフォーマンスにおいて、3.5mをこえる長柄武器はきわめて重要な道具に位置づけられる。奈良県桜井市メスリ山古墳の葬礼には最大4.5mのヤリをかかげた200人をこえる隊列が、靱や盾などの武具を誇示する「軍団」とともに行進した姿を想像できる。ただし、3.5mをこえるヤリ柄やそれに伴うヤリ身に明確な非実用的属性をみいだすことはできないので、これらは実用性を保持しつつ長身化したと判断できる。長短のヤリそれぞれに期待された戦術的役割については、今後の課題としたい。

また、鈴木一有は、メスリ山古墳副槨にみられるヤリ先の多様性から、葬送儀礼参加者各自が携えてきたものであった可能性を指摘している（鈴木1996：157）。先に紹介し、筆者が地方・中央・地方3段階移動説とした論と（表1）、鈴木のような想定を結びつけるとすれば、地方で伝世していた剣が一旦中央

に集められた後にヤリとして地方に「配布」され、さらに王権中枢の葬礼時に再び集積されるという複雑な贈与の連鎖があったことになる。

いずれにせよ、古墳時代前期前半の黒塚古墳や雪野山古墳にみられる3.5mをこえるヤリの登場は、加耶地域で想定されているような馬上の武装としてではなく（門田1988）、儀礼時の効果を重視して、実用性を保持しつつ長身化したと解釈できよう。一方、黒塚古墳棺内のヤリ2（図4の1）の状況をふまえるならば、2m程度の短いヤリは被葬者が所持していた属人的なヤリとして認識され、副葬されていたと考えられる。

4 ヤリからホコへの変化

古墳時代前期後半の粘土槨系埋葬施設、具体的には上殿古墳や東大寺山古墳、石山古墳において顕著となる鉄ヤリは、古墳時代中期以降、徐々にホコへと置き換わっていくことが、すでに多くの論者によって指摘されている。また、この武器様式変化の背後には、朝鮮半島南部の影響が想定されている。

ただし、古墳時代中期の鉄ヤリと鉄ホコのありかたをみると、柄との装着方法に違いこそあれど、出土状況や柄の素材や加工には共通性が目立つ。兵庫県朝来市茶すり山古墳は、直径90mをはかる古墳時代中期前半の大型円墳である（兵庫県教育委員会2010）。粘土で被覆された第1主体からは、鉄ホコ19点が検出されており、中期古墳における鉄ホコ副葬点数としては最多をほこる。鉄ホコは遺体が配置された中央より足下側（西区画）から検出されており、鉄刀20本の上に鉄ヤリ15本と混在して配置されていた。さらに長柄漆膜が多数検出されており、なかには重菱圏文様が施された例も認められる。ヤリとホコのいずれに属するかは、検出状況では不明瞭なものが多いが、多種多様でヤリとホコとで明確な差違が確認できない状況であった。柄長を確定できる石突は出土していないが、ヤリ・ホコ先から棺小口までの距離は約4mであった。なお、刀剣や鉄鏃、弓や革盾、そして革綴短甲2領、革綴冑2点が伴うが、馬具は副葬されておらず、歩兵的な装備のなかに大量のホコとヤリの両者が含まれている点には注意が必要である。また、長柄に

⁷ 豊島直博も、2019年12月に行われた古代武器研究会討議において、ヤリは実際の戦闘にはあまり用いられておらず、大量のヤリを何百人も持って行進すれば、軍事的な威圧効果が大きいのではと発言している（寺前ほか2020：144）。また、同じ場でライアン・ジョセフは集団戦への適応には懐疑的ながらも、ヤリ柄に軽くてしなやかなシノキ属などが使われる点で実用性が無視されていたわけではないとも指摘している（寺前ほか2020：143）。

施された重菱圈文様は、古墳時代前期の東大寺山古墳や上殿古墳のヤリ柄にみられるだけでなく、神奈川県厚木市吾妻坂古墳の鉄ホコなどにもみられる(厚木市教育委員会 2004)。ヤリとホコの柄への黒漆塗布、重菱圈文様の糸巻には共通性があることが指摘されている(仁木 2004: 7-8)。

大阪府堺市黒姫山古墳は墳長122m、古墳時代中期中葉に属する前方後円墳である。前方部で検出された竪穴式石室の西小口部ではホコ9点が検出され、反対の東小口部では壁体に突き刺さった状況の石突5点、短甲内に落下した石突が2点出土しており、両者の距離から全長3.7~4.0mのホコ長が復元されている(大阪府教育委員会 1958; 橋本 2020)。日本最多の出土数をほこる短甲24領、冑24点に加えて、刀剣、鏃などが配置されていたが、馬具は確認されていない。さきほどの茶すり山古墳と同様、歩兵的な装備のなかに4m近い長柄のホコがおさめられていたと判断できる。

古墳時代中期後葉に属する大阪府柏原市高井田山古墳の横穴式石室からはヤリ7本とホコ9点、そして石突18点が検出されている。それらの多くは奥壁コーナー部分に集中して検出されており、壁体に立てかけられていたと推定されている(柏原市教育委員会 1996: 34)。石室上面は崩壊していたが、調査を担当した安村俊史は転落天井石の大きさなどを勘案して、天井高2.2mと推定している(安村 1996: 144)。推定天井高を、ヤリやホコの全長を復元する目安とするならば、3mに満たないヤリ・ホコが配置されていたことになる。初期横穴式石室を構築した集団においても、ヤリとホコが同一の扱いを受けていたこと、両者が共通する鉄製石突を有していたと考えられる。刀や鏃とともに鉾留冑1点、鉾留短甲1領、草摺を構成するとされる小札に加えて、鏡片や鞍を構成したとみられる鉸具といった馬具小片が伴う。

以上の古墳時代中期における実際の長柄の詳細と配置をみるかぎり、ヤリとホコは区分されていない。さらに仁木の集成によれば(仁木 2004)、石突共伴から全長が推定できるホコは27例中、推定全長3.5mをこえる鉄ホコは12例あるが、福岡県荊田町番塚古墳をのぞき中期に属する。また、馬具を伴うのは、番塚古墳や和歌山市大谷古墳、大阪府高槻市土保山古墳の3例、鳥取市倭文6号墳(鳥取市教育委員会 2018)を加えても13例中4例にすぎない。一方で3m以下のホコ21例中14例には馬具が伴っているのとは大きく

異なる。高井田山古墳でみられたように3mに満たない長柄武器と馬具がセットとなるのである。

古墳時代中期における馬の普及度が長柄武器(戈・ホコ)と剣や刀の社会的位置づけに影響を与えたという理解(松木 2001: 54-55)、具体的には馬匹生産や馬具副葬がはじまる古墳時代中期におけるホコの普及を、騎兵装備の充実だとする見解は魅力的である。小林行雄は、騎兵装備への転換として、①短甲及び草摺から挂甲、②重い大型の鉄鏃から細身で軽く鋭利な鉄鏃、③背におう大型の徒鞞から腰にさげる小さい胡籛、④剣形の広い刃の槍からほそく厚みのある袋穂の矛をあげている(小林 1959b: 96-98)。ただし、古墳時代における騎兵の存在を積極的に評価する研究者は多くない。例えば、小林謙一は、装飾壁画や埴輪造形のなかに乗馬の武人や挂甲をまとった騎乗者がみられないことから、その存在に否定的である(小林 1990)。その後、群馬県伊勢崎市雷電神社跡古墳出土の馬形埴輪が整理され、大刀を佩く盛装の人物が騎乗する馬形埴輪の存在が明らかとなった。しかし、6世紀後半に属するとされる本例をのぞくと、17例知られる騎乗の馬形埴輪に盛装人物の騎乗例はない。冑や板甲などの武具を装備した武人の騎乗例は今のところ皆無である(南雲 2019)。また、福島県泉崎村泉崎横穴奥壁には馬上で弓を射る人物が描かれているが、7世紀に下る築造であることには留意が必要だろう。

したがって、古墳時代中期以降にみられるホコ、なかでも3.5mをこえる例の存在は、馬上で使用する実用的な騎馬用武器として新規に普及したとするより、古墳時代前期に登場した長大なヤリの性格、すなわち儀仗的效果を最大化するためという機能が、柄装着方法が変化したホコにも引き継がれた結果であると判断できる。

このような解釈は、先の茶すり山古墳や黒姫山古墳における短甲とホコとの共伴と馬具の不在とも矛盾しない。また、古墳時代のホコに威儀具や「威信財」としての機能を重視した高田貫太の理解とも親和性が高い(高田 1998)。あるいは、ホコの増加を小札甲(挂甲)の出現とともに騎兵的軍装の登場としたうえで、それらが高位の有力者の副葬品として現れる点をふまえ、「倭や韓などの地域を越えた戦士貴族としての国際的な身分の誇示と相互承認の意味をもち、それぞれの地域での威信形成につながった」とする松木武彦の見解とも(松木 2007: 203)、共通点をみいだすことができる。ただし、橋本達也は、中期段

階では小札甲と馬具が一体のもので扱った痕跡は希薄であると指摘しており（橋本 2010）、この段階では騎兵的外装への志向性自体、それほど強くなかったのかもしれない。

中期末の大谷古墳にみられる次の武装、馬冑・馬甲とともに4.5mに復元できるホコが複数配置された状況は一見、朝鮮半島南部的な重装騎兵の装備を彷彿とさせる（京都大学考古学研究室 1959）。しかし、小札が多数出土する一方で、加飾度の高い金銅装馬具セットが伴い、中期的な短甲も併存する武装のありかたは、対外的に通用する「騎兵」としての装いを取りつくるつつも、倭の伝統的な歩兵像からも離脱できなかった権力者の姿を浮かび上がらせているのではないだろうか。

5 古墳時代後期以降の変化

高井田山古墳などでみられたヤリ・ホコの「短小化」は後期に一層明確になることが指摘されている（仁木 2004：16）、齊藤大輔はこの「短小化」をアウトレンジ戦法の制限と捉え、後期において「切り払う」攻撃がしづらい三角穂式鉄ホコが増加すること、これらの多くが片目釘であることから目釘留めのホコに比べると柄を固定する力が弱いとみた。さらに、これを根拠に「倭の鉄鉾の攻撃力は、時期が新しくなるにつれて相対的に低下した」との考えを示している（齊藤 2015：20）。ただし、ホコ身の肉厚さが増した正三角形に近いホコの増加と目釘の簡略化という形態変化は、刺突機能の強化と特化という理解も可能であろう。

また、古墳時代後期には、埋葬施設長が相対的に短い横穴系埋葬施設が普及すること、それらのほとんどは盗掘を受けているために、ホコ先と石突の出土位置で全長が復元できる事例が皆無に近いことにも注意が必要だ。4mをこえる事例が存在したとしても、出土状況での確認ができないとも考えられるのである（仁木 2004：18）。

以上の課題を残すものの、少なくとも2m前後のヤリ・ホコが弥生時代終末期以来、一貫して継続している点を、ここでは重視したい。ヤリからホコへという着柄方法等が変化する一方で、全長が一定のままであるという事実は、このサイズの長柄武器が歩兵の武器として採用され続けたという事実の反映ではないだろうか。

その用法としては、島根県松江市上野1号墳におけ

るヤリ柄の検出状況が参考となるかもしれない（島根県教育委員会 2001）。上野1号墳は直径40m弱の前期末に属する円墳であり、墳頂からは3基の埋葬施設が検出されている。もっとも大きい第1主体は粘土槨であり、棺側の棺床粘土と棺側粘土の間には長柄漆膜が残る鉄ヤリが検出されている。全体で1.9mをはかる漆膜全体は、艶のある黒色であったが、中位は漆に砂鉄が塗り込められており、ザラザラしたものとなっていた。滑り止めのための加工だとみられている。なお、石突は認められない。かつて、文献や正倉院におさめられた「鉾」の形状を念頭に高橋健自や末永雅雄が想定したように片手で中位を把握して、投げ突きするような用法が想定される。

ただし、2m前後のホコでも、別の用法が想定されている資料がある。古墳時代後期に属する栃木県大平町七廻り鏡塚古墳出土の全長218.4cmの鉄ホコ身と石突が取りついた完形の柄が検出されている（大和久 1974）。本例について、藤田らは表面が滑らかな漆塗であることから「滑用柄」とし、左手で柄を支え、右手の前後運動で攻撃するという中世的「鏑」と同様の機能があったと理解する。これに対して、絹糸を柄に対し斜交させ菱形とし、上から漆を塗る加工を滑り止め目的だと考え、握用柄と区分した（藤田・木許 2011：122）。藤田らの区分に従えば、上野1号墳ヤリは握用柄となる。私は、古墳時代における両手で突きだす動作を伴う長兵の存在に懐疑的であるが、藤田らの指摘には説得力がある。弥生時代終末期以来続く2m前後のヤリ・ホコの用法については、今後の課題としたい。

V まとめ

本稿で明らかにした弥生時代から古墳時代の武器の変遷を、先学の整理をふまえつつ（松木 2007；菊地 2010；豊島 2010）、長柄武器を中心に次の4段階にまとめたい。

第一段階（戈中心の段階） 弥生時代前・中期 投射武器としては、縄文時代以来の打製石鏃が広域で使用される。西日本の一部地域では外来系の磨製石鏃が使用されるが、非定着的である。鉄鏃、銅鏃の存在はごくわずかに認められるのみである。衝撃武器として外来系の石製短剣が普及し、近畿地方では打製短剣として独自の発展をとげ、その分布は中部瀬戸内地域から伊勢湾沿岸地域、南関東地方の一部まで広がる。中

期以降は、実用的な銅剣や鉄剣が登場する。副葬品としての出土は北部九州地域に集中しており、本州島西部には埋納された完形品とともに銅剣の破片や切先が散見される。

長柄武器としては、目釘式石戈が前期末に登場する。西日本各地において実用的な打製石器として使用されるが、中期後半の石製短剣の増加とともにその数は減少する。中期初頭には銅矛と銅戈、銅戈を模した石戈が、北部九州を中心に中部高地・関東地方まで普及する。中期後半には鉄ホコ、鉄戈が北部九州地域にみられる。多素材の短兵と長兵、そして句兵が複合的に使用された段階だとも評価できるが(松木 2007: 44)、銅剣の大部分、銅戈と銅矛は早々に非実用化することから、実用武器の複合性が維持された期間や地域は限定的だったとみられる。なお、これら種々の素材の戈身と戈柄の関係は打製石戈をのぞいて不明瞭であるが、戈柄の全長は60cm前後と規格格的であった。また、長柄を模した武器形木器から、銅矛や銅剣は40cm程度の柄が取り付けられた長柄武器であった可能性がある。福岡県立岩堀田遺跡や門田遺跡出土の「鉄剣」を鉄ヤリとする見解があるが、確実な証拠に欠く。

弥生時代中期には、木製甲と置盾や持盾が登場することが、南方遺跡や下之郷遺跡の実例から明らかである。

第二段階(長柄武器欠落と鉄ヤリの出現) 弥生時代後期・終末期 菊地の刀剣類時期区分1・2期に相当する。武器を含む利器全体で金属器化がすすむ。鍬は中九州や中部高地などの一部で磨製石鍬が、また各地で打製石鍬が残るが、銅鍬、鉄鍬が各地で著しく増加し、以後の主流となる。鉄製短剣が関東地方まで広がり、同型の銅剣も少数だが西日本各地で用いられる。日本海沿岸、山陰や北陸に外来系の大刀や素環頭大刀が少数みられるようになる。

長柄武器の変化としては、儀器を含めた戈の消滅が大きい。長野県上田市上田原遺跡において当該期に属する可能性のある鉄ホコがあるものの、基本的な武器組成から鉄ホコは欠落していたとみられる。したがって、後期段階には長柄武器の欠落期があるといわざるをえない(松木 2007: 45)。終末期になると鉄ヤリが副葬品として関東地方を含む広域において確認できるようになる(豊島 2008, 2010)。その長さは、全長2m前後であった。戈の消滅による長柄武器の欠落後に登場する点、以降もこの長さの長柄武器が安定的に

継続することから、私は実戦的な要求により、2m前後の鉄ヤリが普及したと考える。この鉄ヤリが登場した要因には、弓矢と短剣をもつ戦士に実戦的な2m前後のヤリを所持する戦士が加わった「伍」的戦闘集団(林 1972)が編成されたという理解も成り立つ。

盾、甲などの防具は引き続き、木製品である。

第三段階(長大鉄ヤリの出現) 古墳時代前期 菊地の刀剣類時期区分3期に相当する。定型的な銅鍬や鉄鍬が登場する。靱とともに大量の鍬を副葬する習俗が成立し、とくに大型古墳では鍬や刀剣の大量副葬が普遍化する。ただし、刀剣は短剣が主体であり、前段階に登場した大刀・長剣あるいは素環頭大刀は、引き続き稀少な存在にとどまる。

副葬品組成からは、長柄武器である鉄ヤリの増加がみられる。有力古墳では全長3.5mをこえる鉄ヤリが出現し、前段階からみられる2m前後のヤリに加えて、長短2種の鉄ヤリが副葬されている。ただし、3.5mをこえる鉄ヤリは戦術的要求のみによって長身化したというよりは、定型的な前方後円墳出における儀礼の荘厳化のなかで創出された武威のシンボルであったと考えられる。また、当該期の古墳から出土するヤリ本体には、弥生時代後期後葉まで数多くみられた刃関双孔をもつものが散見されることから、弥生時代に各地で鉄剣として使用されていた剣身が、中央勢力によって、あらたに規格的な装具を与えられ、配布されたと考えられる(豊島 2010: 134)。このような遠隔地のエリート間のモノの複雑な贈与関係を介した価値共創こそが、古墳時代社会の特質であり、強い示威機能を有する長大な「武器」は、その目的にもっとも合致したアイテムであったと考えられる。なお、鉄ホコは少数の古墳で認められるが、戈はみられない。

前期後半以降には、規格的な漆塗革盾が広域にみられるようになる。また、中国系の可能性のある小札革綴青、少し遅れて登場する半島南部系技術によって製作された堅矧板革綴短甲、方形板革綴短甲といった鉄製甲冑が、少数ながらみられるようになる。

第四段階(ヤリからホコへの遷移的变化) 古墳時代中期 菊地の刀剣類時期区分4~6期に相当する。銅鍬は減少し、鉄鍬の大量副葬は継続する。朝鮮半島の鉄鍬を祖型とする細根の新しい鉄鍬が登場する。長剣・大刀が増加するが、中期後半以降は鉄剣の副葬数自体が減少し、後期には一部有力古墳の副葬品として残存するにすぎない。

鉄ホコは次第に増加し、相対的に鉄ヤリが減少して

いき、後期には消滅する。ヤリ・ホコとも3.5mをこえる長身のは次第に目立たなくなる。

防具としては、長方板革綴短甲・三角板革綴短甲の登場が中期の画期である。中期中葉には馬具が普及するが、胡籙の出現をのぞけば、馬上での操作を重視した武器・武具の革新は不明瞭である。

VI おわりに

本稿では、これまで通時的、体系的に論じられることがなかった弥生・古墳時代の長柄武器の変遷を明らかにした。弥生時代中期まで長さ60cm前後の戈を中心とした長柄武器が用いられ、それが後期には消滅し、終末期において2m前後の鉄ヤリが広域で登場する。このことが、長柄武器最大の画期であることを指摘した。また、その直後には3.5mをこえる鉄ヤリが登場するが、これは戦術的要望のみによって生みだされたのではなく、儀礼的効果も重視され創出されたと考えた。2m前後の長柄武器は、ヤリからホコへと着柄方法こそ変化させるが、古墳時代後期まで一貫して長柄武器の中心を占める。このことを根拠に、私は長柄武器を用いた戦闘方法自体は、古墳時代中期、5世紀以降の馬匹生産の開始や、騎兵を有する高句麗をはじめとする朝鮮半島諸勢力との「交戦」をへても、劇的には変化しないとみる。

金石・文献資料において対外的な交戦が頻出する5世紀以降において、半島諸勢力との軍事的交流という外的影響は無視できない。『日本書紀』に記載された武器・戦闘記述を集成、類型化した藤原哲によれば、朝鮮半島における戦闘の記述には「弓矢」とともに「矛」や「戟」といった長柄武器が登場するのに対して、日本列島内あるいは神話世界での記述には、稲城をのぞき本格的な城郭戦や騎馬戦が登場せず、弓矢と刀剣といった武器や、それらを用いた歩兵戦が中心であるという（藤原 2018）。異なる資料からの検討であるが、本稿で指摘した騎兵装備の非定着性とも矛盾しない。

資料的制約から刀剣や鏃、甲冑に比べると分析対象とならなかった長柄武器は、集団での戦闘や軍事体制を復元するうえで極めて重要な武器である。今回の成果をふまえれば、日本列島外の他地域や他時代の戦闘方式や軍事編成と社会構造との関係を比較することが可能となる。それは、日本列島における社会複合化にはたした集団抗争の特徴を解明する大きな手がかりと

なる。この比較の視点を今後の最大の課題として、本稿を閉じたい。

謝辞

本稿の執筆にあたっては、2019年12月の第16回古代武器研究会参加者ならびに新学術領域研究（研究領域提案型）「出ユーラシアの統合的人類学・文明創出メカニズムの解明」A03班「集団の複合化と戦争」のメンバーから有益な助言をえた。また、資料調査や文献等の収集にあたっては、忽那敬三、高田貫太、樋上昇、松木武彦、水野敏典、ライアン・ジョセフ、国立歴史民俗博物館、奈良県立橿原考古学研究所の諸氏・諸機関のご協力をえた。なお、本研究はJSPS 科研費 JP19H0573の助成を受けたものである。

参考文献

愛知県埋蔵文化財センター

- 1992 『朝日遺跡3（木製品 骨角製品 金属製品編）』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第32）、愛知県埋蔵文化財センター。

厚木市教育委員会

- 2004 『神奈川県厚木市 吾妻坂古墳出土資料調査報告』。

阿東町教育私員会

- 1998 『宮ヶ久保遺跡』山口県阿東町埋蔵文化財報告書第1集。

池淵 俊一

- 1993 「鉄製武器に関する一考察—古墳時代前半期の刀剣類を中心として—」『古代文化研究』1: 41-104。

市原市文化財センター

- 1989 「神門三号墳」『市原市文化財センター年報』昭和62年度: 23-29。

上原 真人

- 1993 『木器集成図録近畿原始篇（解説）』奈良国立文化財研究所。

大阪府教育委員会

- 1958 『河内黒姫山古墳の研究』（大阪府文化財調査報告書1）、大阪府教育委員会。

大和久 震平

- 1974 『七廻り鏡塚古墳—栃木県下都賀郡大平町—』帝国地方行政学会。

岡村 秀典

- 1999 『三角縁神獸鏡の時代』（歴史文化ライブラリー66）、吉川弘文館。

岡山市教育委員会

- 2005 『南方（済生会）遺跡—木器編—』岡山市教育委員会。

小田 富士雄

- 1977 「鉄器」『立岩遺蹟』福岡県飯塚市立岩遺蹟調査委員会（編）、207-242、河出書房新社。

- 小野山 節・森下 章司・高橋 克壽
1993 「石山古墳」『紫金山古墳と石山古墳』(京都大学文学部博物館図録第6冊)、京都大学文学部考古学研究室(編)、86-89、京都大学文学部博物館。
- 鹿島町教育委員会
1985 『奥才古墳群』鹿島町教育委員会。
- 柏原市教育委員会
1996 『高井田山古墳』(柏原市文化財概報1995-II) 柏原市教育委員会。
- 菊地 芳朗
1996 「前期古墳出土刀剣の系譜」『雪野山古墳の研究』考察編、雪野山古墳発掘調査団(編)、49-82、八日市市教育委員会。
2008 「成塚向山1号墳出土鉄製品からみた東日本の前期古墳」『成塚向山古墳群』(群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書426)、485-498、群馬県埋蔵文化財調査事業団。
2010 『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会。
- 木更津市教育委員会
2002 『高部古墳群I—前期古墳の調査—』(千束台遺跡群発掘調査報告書VI)、木更津市教育委員会。
- 京都大学考古学研究室
1959 『大谷古墳』和歌山市教育委員会。
- 神戸市教育委員会
2004 『西求女塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会。
- 御所市教育委員会
2001 『鴨都波1号墳 調査概報』学生社。
- 後藤 守一
1926 『考古学講座2 原始時代の武器と武装』雄山閣。
1937 「加賀國江沼郡勅使村字二子塚所在狐塚」『古墳発掘品調査報告』(帝室博物館学報 第9冊)、44-66、帝室博物館。
1940 「古墳時代前期の剣」『考古学雑誌』30-3:1-22。
- 小林 謙一
1990 「歩兵と騎兵」『古代史復元7 古墳時代の工芸』白石太一郎(編)、141-152、講談社。
- 小林 行雄
1950 「三重県名賀郡石山古墳(第3年度調査)」『日本考古学年報』3(昭和25年度):95。
1951 『日本考古学概説』創元社。
1959a 「鉄剣・鉄槍」「鉄矛」「槍」『図解考古学辞典』水野清一・小林行雄(編)、84-686, 691, 996、創元社。
1959b 『古墳の話』(岩波新書342)、岩波書店。
- 小松市教育委員会
2003 『八日市地方遺跡I(第2分冊 遺物報告編)』小松市教育委員会。
- 近藤 喬一
1986 「東アジアと青銅祭器—農耕儀礼の祭器としての武器と鐸—」『銅剣・銅鐸・銅矛と出雲王国の時代』松本清張(編)、118-172、日本放送出版会。
- 権現山51号墳刊行会
1991 『権現山51号墳兵庫県揖保郡御津町』権現山51号墳刊行会。
- 齊藤 大輔
2015 「古代東アジアにおける特殊鉄銚の系譜」『古代武器研究』11:7-25。
- 潮見 浩
1982 『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館。
- 島根県教育委員会
2001 『上野遺跡・竹ノ崎遺跡』(中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書9)、日本道路公団中国支社 島根県教育委員会。
- 下垣 仁志
2018 『古墳時代の国家形成』吉川弘文館。
- 末永 雅雄
1941 『日本上代の武器』弘文堂書房。
1943 『日本武器概説』桑名文星堂。
- 菅谷 文則
1975 「前期古墳の鉄製ヤリとその社会」『橿原考古学研究所論集創立三十五周年記念』橿原考古学研究所(編)、315-346、吉川弘文館。
- 杉井 健
1996 「竪穴式石室の遺物出土状況」『雪野山古墳の研究 報告篇』雪野山古墳発掘調査団(編)、49-82、八日市市教育委員会。
- 杉山 和徳
2013 「沼津市高尾山古墳出土のヤリをめぐる諸問題」『静岡考古学研究』44:33-54。
- 杉山 晋作
1989 「まとめ」『古墳時代研究III—千葉県君津市所在八重原1号墳・2号墳の調査—』50-64、古墳時代研究会。
- 鈴木 一有
1996 「前期古墳の武器祭祀」『雪野山古墳の研究考察編』雪野山古墳発掘調査団(編)、145-174、八日市市教育委員会。
- 妹尾 周三
2018 「山陽中部」『前期古墳編年を再考する』中国四国前方後円墳研究会(編)、189-200、六一書房。
- 高田 貫太
1998 「古墳副葬鉄銚の性格」『考古学研究』45(1):49-70。
- 高橋 健自
1912 「古代の槍」『考古学雑誌』3(3):10-16。
- 滝沢 誠・平林 大樹
2012 「槍」『高尾山古墳発掘調査報告書』(沼津市文化財調査報告書第104集)、47-50、沼津市教育委員会。
- 田中 新史
1989 「出土遺物」『古墳時代研究III—千葉県君津市所在

- 八重原 1号墳・2号墳の調査一』21-42、古墳時代研究会。
- 1991 「神門三、四、五号墳と古墳の出現」『歴博フォーラム 邪馬台国時代の東日本』国立歴史民俗博物館(編)、130-136、六興出版。
- 田中 琢
- 1977 「剣、矛、戈—争乱とまつり—」『日本美術大系』4:164-168、講談社。
- 田原本町教育委員会
- 2009 『唐古・鍵遺跡—範囲確認調査—』1(田原本町文化財調査報告書第5集)、田原本町教育委員会。
- 千葉県文化財センター
- 2001 『袖ヶ浦市椿古墳群』(東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告8)、千葉県文化財センター。
- 寺沢 知子
- 1990 「鉄製ヤリ」『園部垣内古墳』(同志社大学文学部考古学調査報告第6冊)、112-115、同志社大学文学部文化学科。
- 寺前 直人
- 1998 「弥生時代の武器形石器」『考古学研究』45(2):61-80。
- 2001 「弥生時代開始期における磨製石斧の変遷—中部瀬戸内地域と大阪湾沿岸地域を中心として—」『古文化談叢』46:27-52。
- 2010 『武器と弥生社会』大阪大学出版会。
- 寺前 直人ほか
- 2020 「総合討議」『古代武器研究』16:135-150。
- 鳥取県教育文化財団
- 2002 『青谷上寺地遺跡4』(鳥取県教育文化財団調査報告書74)、鳥取県教育文化財団。
- 鳥取市教育委員会
- 2018 『倭文6号墳出土遺物の研究—出土品再整理報告書—』(鳥取市文化財調査報告第25集)、鳥取市教育委員会。
- 豊島 直博
- 2003 「ヤリの出現」『古代武器研究』4:61-68。
- 2008 「古墳時代前期におけるヤリの編年と流通」『東国史論』22:1-26。
- 2010 『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房。
- 2013 「高尾山古墳出土の鉄ヤリと関連資料」『西相模考古学研究』22:133-136。
- 中山 平次郎
- 1925 「筑前国糸島郡福吉村吉井発見物と推定すべき銅剣及異式の鉄剣」『考古学雑誌』15(4):25-29。
- 奈良県教育委員会
- 1966 「和爾上殿古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』23:33-59。
- 奈良県立橿原考古学研究所
- 2018 『黒塚古墳の研究』(奈良県立橿原考古学研究所研究成果13)、八木書店。
- 南雲 芳昭
- 2019 「人が乗る馬形埴輪」『集まれ!ぐんまのはにわたち』(群馬県立歴史博物館第99回企画展展示図録)、128-133、群馬県立歴史博物館。
- 仁木 聡
- 2004 「古墳時代における長柄武器について—全長規格とその武装—」『古代学研究』165:1-24。
- 西川 宏
- 1966 「武器」『日本の考古学V 古墳時代下』251-273、河出書房新社。
- 沼津市教育委員会
- 2012 『高尾山古墳発掘調査報告書』(沼津市文化財調査報告書第104集)、沼津市教育委員会。
- 寝屋川市教育委員会
- 1989 『高宮八丁遺跡(大阪府寝屋川市)木器編』寝屋川市教育委員会。
- 野島 永・高野 陽子
- 2002 「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(3)」『京都府埋蔵文化財情報』83:25-36。
- 橋本 達也
- 2010 「古墳時代中期甲冑の終焉とその評価—中期と後期を分かつもの—」『待兼山考古学論集』II(大阪大学考古学研究室20周年記念論集)、481-501、大阪大学考古学研究室。
- 2020 『巨大古墳の時代を解く鍵—黒姫山古墳—』(シリーズ遺跡を学ぶ147)、新泉社。
- 林 巳奈夫
- 1972 『中国殷周時代の武器』京都大学人文科学研究所。東大阪市文化財協会
- 1987 『鬼虎川遺跡の木質遺物』(第7次発掘調査報告書第4冊)、東大阪市文化財協会。
- 兵庫県教育委員会
- 2010 『史跡 茶すり山古墳』(兵庫県文化財調査報告第383冊)、兵庫県教育委員会。
- 広島市教育委員会
- 1983 『弘住遺跡発掘調査報告書』(広島市の文化財第25集)、広島市教育委員会。
- 深澤 芳樹
- 1998 「戈を持つ人」『みずほ』24:47-58。
- 福岡県教育委員会
- 1984 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告5—甘木市所在立野遺跡の調査—』福岡県教育委員会。
- 福岡市教育委員会
- 1996 『吉武高木遺跡VIII 飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書2』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集)、福岡市教育委員会。
- 藤田 和尊・木許 守
- 2011 「鍵とその表象品」『勝部明生先生喜寿記念論文集』110-125、勝部明生先生喜寿記念論文集刊行会。

- 藤原 哲
2018 『日本列島における戦争と国家の起源』同成社。
- 松木 武彦
2001 『人はなぜ戦うのか—考古学からみた戦争—』講談社。
2007 『日本列島の戦争と初期国家形成』東京大学出版会。
- 松阪市教育委員会
2005 『史跡宝塚古墳』(松阪市文化財報告書1)、松阪市教育委員会。
- 松山 智弘
2016 「山陰」『前期古墳編年を再考するⅢ—地域の画期と社会変動—』(中国四国前方後円墳研究会第19回研究集会)、61-78、中国四国前方後円墳研究会。
- 三重県埋蔵文化財センター
2005 『菟上遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財調査報告227-7)、三重県埋蔵文化財センター。
- 水野 敏典
2018 「黒塚古墳出土武器をめぐる諸問題」「鉄製品」『黒塚古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所研究成果第13冊、奈良県立橿原考古学研究所(編)、314-321, 405-407、八木書店。
- 宮津市教育委員会
1988 『波路古墳・波路城跡・荒神神社跡』(宮津市文化財調査報告第16集)、宮津市教育委員会。
- 宗像市教育委員会
2014 『国史跡 田熊石畑遺蹟—福岡県宗像市田熊所在遺跡の発掘調査報告—』(宗像市文化財調査報告書第71集)、宗像市教育委員会。
- 村上 恭通
1999 「鉄製武器形副葬品の成立とその背景—三韓・三国時代と前方後円墳成立期を対象として—」『先史学・考古学論究』Ⅲ(白木原和美先生古稀記念献呈論文集): 59-85。
- 森 貞次郎
1960 「青銅器の渡来」『世界考古学大系2』杉原荘介(編)、78-84、平凡社。
- 守山市教育委員会
2017 『下之郷遺跡発掘調査報告書—総括編—』守山市

- 教育委員会。
- 門田 誠一
1988 「古代加耶の戦士」『考古学と技術』(同志社大学考古学シリーズIV) 森浩一(編)、497-517、同志社大学考古学シリーズ刊行会。
- 安村 俊史
1996 「横穴式石室について」『高井田山古墳』(柏原市文化財概報1995-II)、141-164、柏原市教育委員会。
- 柳田 康雄
2011 「沖ノ島出土銅矛と青銅器祭祀」『宗像・沖ノ島と関連遺産群調査研究報告』Ⅰ: 1-28、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議。
- 八日市市教育委員会
1996 『雪野山古墳の研究 報告篇』八日市市教育委員会。
- 吉田 広
2014 「弥生青銅器祭祀の展開と特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』185: 239-281。
2015 「青銅器の足跡—信州に至る北陸ルート—」『小松発北陸新幹線ルートの弥生文化を探る』小松市埋蔵文化財センター(編)、13-24、小松市・小松市教育委員会。
- 米子市教育委員会
1978 『日原6号墳発掘調査報告』米子市教育委員会。

挿図出典

図1の1~3: 寺前 2010、4: 上原 1993。図2の1: 岡山市教育委員会 2005、2・6・7: 寺前 2010、3: 守山市教育委員会 2017、4: 鳥取県教育文化財団 2002、5: 小松市教育委員会 2003。図3の1: 広島市教育委員会 1983、2: 木更津市教育委員会 2002、3: 千葉県文化財センター 2001、4: 沼津市教育委員会 2012、5: 市原市文化財センター 1989、6: 宮津市教育委員会 1988、7: 米子市教育委員会 1978。図4の1: 奈良県立橿原考古学研究所 2018、2: 八日市市教育委員会 1996、3: 奈良県教育委員会 1966。図5: 藤田・木許 2011。図6: 松阪市教育委員会 2005。以上の報告書等から一部改変の上、転載。

Changes in Long-Handled Weapons during the Yayoi and Kofun Periods

Naoto TERAMAE*

An analysis of changes in long-handled weapons over 1500 years during the Yayoi and Kofun periods based on the location of the weapons with wooden handles and burial sites found that halberds with 60cm handles were used in the Middle Yayoi period, but subsequently fell out of use in the Late Yayoi period. The analysis further found the appearance of 2m iron spears (or javelins) in the Final Yayoi period that were placed at burial sites in various parts of the Japanese archipelago.

The analysis also identified the appearance of 4m iron spears in the Early Kofun period, in addition to the 2m iron spears. However, based on the existence of a decorative scabbard, it is believed that the 4m spears were not created to strengthen offensive power, but rather to impress the surrounding people with the weapons at the time of ritual ceremonies. After the Middle Kofun period, the number of spears decreased and the number of hoko. (a spear into which a handle can be inserted) hole) increased. However, until the late Kofun period, long-handled 2m weapons of were used constantly.

Therefore, I believe that even after the start of horse raising after the Middle Kofun period and the war with the cavalry forces from the Korean peninsula, the elite of the Japanese archipelago did not need a practical cavalry unit to wield weapons on horseback.

Keywords

Kofun period, Yayoi period, halberds, iron spears, cavalry, wooden-handled weapons

* Komazawa University